

---

# だうん

篠義

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だうん

### 【Nコード】

N5867P

### 【作者名】

篠義

### 【あらすじ】

関西夫夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは

## そのいち

「あほは風邪ひかへん」というのは迷信やと思う。なんせ、うちのあほが、今、ひいている。職場で貰ったらしく激しく発熱して喉が腫れているので声も出ないし、飯粒も喉を通らないという本気の風邪だ。

「病院行くで？」

インフルエンザでは、市販の風邪薬では太刀打ちができない。最初は熱があるだけだから、と、市販のやつを飲ませたが、悪化した。いや、悪化させやがったが正解だ。大人しく寝ていればいいものを、このバカは、天気がいいからという理由で、この寒空に網戸を洗い、ついでに、風呂場のカビとりとかしてやがったからだ。

帰宅した俺が、びっくりするぐらいの発熱模様で、夜間の救急診療へ走ろうかと考えたほどだった。大したことはない、と、当人は言うので、とりあえず、朝まで様子を見た。実のところ、インフルエンザなら、この発熱で菌は死ぬから、翌日には楽になるかもしれないと思っただのも、様子見の理由だ。だが、現実には、まだ熱が治まらず、呻いているので、あほの健康保険を用意した。それを見るたびに、俺は、少し寂しい気分になる。お互いがお互いと、結婚していると思っっているが、現実には、養子縁組でもない限りは、俺たちは、ただの同居人ということになる。だから、健康保険証も別々だ。

今は、そんなことを考えている場合ではない、と、気分を切り替えて、花月の部屋に入る。

「……うー……」

「あ？ 仕事か？ 休んだがな。おまえが、そんなんではオチオチしてられへん。とりあえず、病院で抗生物質と点滴してもらって、昼から出る。」

「……うー……うー……」

「じゃかましいつつんじゃあつ。どつかのあほが、余計なことし  
くさるから、俺は半日も有給を潰すんじゃあつ。どあほつ。」  
病人が、心配しなくても、自分で行くとかぬかしたので、蹴り  
を見舞って、その頭にコートを叩きつけた。熱は39度を越えている。  
受け付けができるわけがない。総合病院は、さすがに混むだろうから、  
近くの内科へ出向いた。

いや、もう、わかりすぎるほどわかる診断結果だった。  
「インフルエンザですね。脱水症状を起こしてますから、点滴しま  
す。」

一時間ほどかかるとのことだったので、俺は、処置室から待合  
に出た。それから、病院の玄関を出て、外でタバコをふかす。あほ  
が、あんなに酷い風邪をひいたのは、あまりないことだ。だいたい  
は、自分のほうがひどく。

・・・もしかして、俺のほうが介護するとか言うことも有り得る  
んやな?・・・

年をとれば、それなりに身体も弱る。至極健康体のあほだって、  
どうなるかわからない。寝たきりになったら、世話するのは俺の  
仕事だ。

・・・まあ、かまへんけどな。それはそれで。・・・

よぼよぼしたあほの世話をするのは楽しそうだ。いや、俺も年と  
ってるから、「辛いのおー」とか愚痴るのかもしれない。そんな  
想像していたら、おかしくて頬が勝手に緩んだ。別れている未来が  
思い浮かばないからだ。

・・・喉が腫れてるから、お粥ぐらいか・・・

とりあえず、食事をさせなければ、と、シユミレートして、病院の中へ戻った。点滴が終わるまで、待合室で、ぼんやりとしていたら、つい、うとうととしていた。

病院から抱えるようにして、家に戻って、とりあえず、ベッドに叩き込んだ。メシを食わさないと、次のクスリが飲ませられない。

「やっぱ、お粥さんやるな、ここは。・・・いや、ぐたくたのおじやのほうか栄養あるか・・・うわっ、野菜があらへんやんけっつ。」

メニューを決めて、冷蔵庫を覗き込んだら野菜がない。そういや、昨日は、メシを食っていないし、その前は、具合が悪かったあほのお陰で、月見うどんだけというメニューだった。いつもは、あのおほが買い物しているわけだから、具合が悪くて、何も無いのは当たり前前だ。

とりあえず、お粥を白米から炊いて、梅干としらすを用意して、それで、午後になっていた。

「花月っつ、ちよっと起きろ。」

手が一杯だったから、足で、あほの身体に軽く蹴りを見舞う。もそもそと動いて、よれよれのあほが顔を出した。

「・・・うー・・・」

「なんでもええわ。メシ食うて、クスリ飲め。」

点滴と注射で、ちよっと持ち直したあほは、ゆっくりと起き上がった。よくよく考えたら、俺が具合が悪い場合と、その対応が雲泥の差だ。あほは、ものすごく甲斐甲斐しい世話をする。俺が起きるのも難儀な時は、そのまんま、「あーん」と、寝たままでメシを食わせてくれるのだ。

俺には、そこまでの世話はできないので、というか、そんな恥ずかしいことをしてやったら、末代まで、あほに言いまくられるだろう。

「ほら、茶碗持てるやる？」

「・・・うー・・・」

「あ？ 俺か？ 後で食うから、おまえは病人の時ぐらい、大人しくしとけ。」

で、まあ、このあほな病人は、それで言うことなんか聞く訳もなく、うーうーと、手を台所へと向けて、「おまえも、ここで食え。」

と、真剣な顔をして睨む。なぜ、そういうことに気づくんだろうかと、思いつつ、俺も茶碗を持ってきて、一緒に、お粥を食った。

「・・・ほか・・・」

「別にええ。ああ、俺、ちょっと職場に顔出して買い物してくるわ。おまえは寝とけよ。」

栄養が足りないから、他のものも食えと言っているらしいので、適当に誤魔化した。別に、それほど空腹ではない。一膳のお粥を平らげたので、クスリを飲ませた。これでいいだろうと立ち上がった。また、うーうーとお粥の入ったままの俺のお茶碗を指差す。  
「もうええ。俺は出てくる。」

病人の横で、もっちゃりもっちゃりとお粥なんぞ食ってる場合ではない。半日有給だから、かなり遅刻している。慌てて、着替えて家を出た。半年前に入った俺の部下が、とりあえず、本日業務はこなしているはずだから、そのチエックだけはしなければならぬ。それから、買い物して、晩御飯を食べさせないといけないから、あまり時間がない。

・・・もう、なんでもええわ。とりあえず、金が滞ってなかったら、そのまんま、ぶちこんどいたらええやる。・・・

乱暴な作戦を考えて、俺は階段を駆け下りた。

・・・なんとか、熱が下がったな・・・

うつらうつらと寝て、ようやく起きたら、楽になっていた。とはいえ、やっぱり、喉が腫れていて声はない。汗でべたべたになったパジャマを着替えようと起きあがった。

ついでに、汗だけ流しておこうと、風呂場へ着替えと共に移動する。そして、着替えたものを洗濯機に放り込んで、中身を確認して溜息をひとつついた。

・・・着替えぐらいしとけよ、水都・・・

自分の分しか入っていない洗濯機の現状から察するに、シャワースラ浴びずにいるらしいことが判明する。おとついに、洗濯したから、昨日からということになるが、たぶん、当人は気づいていないだろうと、俺は、がっくりと肩を落として、風呂場へ入った。

俺の嫁は、些か人生を投げているので、自分のことには興味がない。たとえば、食事とか入浴とか睡眠とか、普通は、無意識にやることすら無視できてしまうからだ。発熱して食事の準備すらできなかったから、昨日は何も食べなかったはずだ。今日も、俺のお粥を、ちよっと食べただけで、仕事に出してしまった。

・・・あいつ、昔よりひどくなってないか？・・・

昔は、一応、一日一食ぐらいは食べていたはずだ。それすら、どうでもよくなっているとしたら、人生投げ遣り度数が確実にアップ

している。

熱いシャワーを浴びてから、水を飲んで、冷蔵庫の中を覗いた。買い物していないから野菜がない。冷凍している常備菜はあるが、それだけでは心もとないので買い物に出ようかと、普段着に着替えて財布を手にした。

・・・うーん、俺も食われへんから、高野豆腐とか、エンドウの卵とじとか、そういうのでええかな・・・

玄関に向かったら、そこで、思わず立ち止まった。玄関の扉に、折込みチラシの裏全面に書かれた、「出たら、ぶつ殺す」の文字が目に入ったからだ。

「ぶつつ、ははははー・・・あーいてえー・・・笑かすなよ・・・」

それも、急いでいたのかガムテープで貼り付けてある。心配してのことらしいが、あまりにも乱暴な殺し文句に笑ってしまった。

・・・そういや、買い物してくるとか言ってたな・・・

おぼろげな俺の嫁の言葉を思い出した。たぶん、何か買ってくるのだろう。それなら、待っているとするか、と、俺は居間へ踵を返した。

動くとも熱が上がるらしく、こたつで、大人しく横になった。ウィークデーの午後なんてものは、碌なテレビもないからつけていない。のんびりと外の音を聞いている。もしかしなくても、俺が介護必

要な状態になったら、あいつのほうが先にくだばるだろうと思った。自分に対する世話を一切しない俺の嫁は、俺のことしかしないだろう。どんどん顔色が悪くなってやつれていく俺の嫁を、黙って見ていなければならぬとしたら、俺は、かなり辛い。「食事をしろ」と、言っても、「食べた」と言われ、「横になれ」と言っても、「今、忙しい」と、怒鳴られたら笑うに笑えない。

手を離すつもりはない。

けれど、人生何があるか、先のことはわからない。

「……やっぱ、俺が動けなくなったら、あいつを道連れにするほうが楽やろうな……」

たまに、ふと思うことだ。俺が世話をしなくなれば、完全に人生を投げてしまっただろうから、それなら、そうするほうがいいのか？ と、考えてしまう。

「……いや、まあ、俺が看取ったつたら、それで済むことやけどなあ……」

健康であり続ける必要がある。お互いに、健康であれば、こんなことを考えなくていい。

「……帰ってきたら、風呂に入れて言わなあかな……せやせや……」

散らばっている折込みチラシを集めて、俺もペンを手にした。「風呂入れ、カビるぞ。」とか「餓死する前にメシを食え。」とか「毎日、パンツぐらい履き代えろ。」とか、思いつく限りの

ことを書きなぐって、こたつの天板にガムテで貼り付けておいた。

使えねえーと、文句を吐きつつ、タクシーで家に帰ったのは、十時を回っていた。無理矢理に夕刻に終わらせようと思っていたら、部下は、ちっとも仕事をしていないことが判明して雷を落とすことから始まり、ついでに、その部下たちに泣かれて時間がかり、余計に仕事が遅れた。泣いて済むのは、学生だけだ、と、再度、怒鳴りつけて、やるべきことをやらせて、自分の持分も処理していたら、そんな時間だ。結局、買い物は、会社の側のコンビニで買うので手一杯だった。

……とりあえず、これを食わせて、ほんで、薬飲ませたらええか……

手にしたコンビニの惣菜と冷凍うどんを覗きこんで階段を上がる。汗をかいているだろうから着替えも必要だろうし、シートも代えなければならぬだろう。いろんなことを考えて、部屋の鍵を開けた。エアコンが効いていて室内は暖かい。居間へ入ると、こたつに、同居人が沈没していた。机の上には、作り置きしたお粥と梅干と、飲んだと思われる薬の袋がある。

……せやんなあー腹は減るもんなー……

間に合わなくて申し訳ないと思ったが、今、ここで眠っているなら、先にベッドのシートを取り替えようと、荷物を置いて立ち上がった。

「やっぱりか？　なんで大人しいしてられんのやっつ、あのあほはっつ。」

部屋に入って開口一番叫んだ。きつちりとベッドメイクされているベッドから察するに、シーツを取り替えたらしい。もしや、と、自分の部屋も覗いたら、同じように綺麗になっていた。暗くなつてはいるが、ベランダには白いものがひらひらとしているのも判明した。

つまり、病人は自らで着替えて、さらに、シーツも取り替えて、ご丁寧にも、自分の分もやってくれたらしい。病気の時ぐらい、そういうことはしなければいいのに、と、俺はがっくりと肩を落とした。

水分と栄養は補給しなければ、と、ゼリー飲料とポカリを袋から取り出した。こたつの上を片付けておこうとしたら、下から、「パソングらい履き換えろ」とか「風呂に入れ、かびる」とか「メシを食え、痩せたら抱き心地が悪い」とか、もう、それは、どんな悪口なんや？　というような文字が書かれたチラシの裏が現れた。「おっおまえなー、なんじゃっつ、これはっつ。」

極めつけが、「いくら俺が物好きでも、すえた匂いのする嫁は舐められへん」という文字だ。

「舐めんでええわいっつ。」

ガムテで止められた、それらを、びりびりと引き剥がし、空っぽの鍋に投げ込んで台所へ運んだ。騒々しい物音で、病人も目を覚ましたのか、もそもそと起きて、「おうー」と、声を上げた。

「花月、とりあえず、これ。マルチビタミンとブドウ糖を摂れ。」

「・・・うー・・・おま・・・めし・・・くえ・・・」

「いや、俺はええから。すまん、仕事が長引いてしもて・・・ていうか、洗濯なんかすんなよっつ。こういう時は、嫁の俺がする

もんや。」

「・・・ひまで・・・のー・・・ん?・・・うどんか?・・・」  
朝よりは、幾分かマシな顔色で声も出るようになっていた。食卓のコンビ二袋を目ざとく見つけて、花月は立ち上がった。

「ああ、食つか?」

「・・・いや・・・おまえ・・・」

「俺はええから、それを吸え。ほんで、ちゃっちやと寝ろ。」

「あー? おまえ・・・食うまでは・・・寝られん・・・風呂も・・・」

「あほやる? おまえ。俺のことはええ。」

「あかん。」

花月が、物凄く真剣な顔で、俺を叱る。俺は、かなり壊れているので、自分のことは考えない。いつもは、花月が、俺の世話をする。そうしないと、俺は何もしないからだ。だが、こういう時ぐらい、自分の身体のことだけ考えていて欲しいとは思う。俺は成人しているし、至極健康ではあるのだから、数日ぐらい放置しても壊れたりはない。

「二、三日ぐらいええ。」

「あかん。」

もう一度、叱られる。わかってはいるが、自分には興味がないのだから仕方がない。あんまり目が真剣で、ちよっと視線を下げたら、そのまんま、花月は台所へ行って、さっさと冷凍うどんをコン口に仕掛けた。

「・・・これもな・・・ほんで、風呂・・・」

袋から取り出したゼリー飲料を、無造作に口に突っ込まれて、それから、花月は風呂場を指した。風呂に入れ、ということらしい。

結局、風呂に入って、うどんを食べたら俺は、花月のとなりで寝

た。そうしないと眠れなくらい神経が高ぶっていたらしい。とんとんと背中を叩かれていると、どっちが病人かわからない。でも、この温かさが素直に嬉しいとは思う。

「……すまん……」

「……ええつて……仕事やから……しゃーないやないか。」

看病も、碌にできていないことを謝ったら、また、トントンと背中を叩かれた。花月は、いつも変わらず、俺のことを世話してくれるというのに、俺は、その半分もできていないのが、ちょっと残念だ。

「……ちゃんと、寝ーや……」

おとついであたりから、あまり、ちゃんと寝ていなかった俺は、花月にあやされて気が抜けて目を閉じた。

十分な睡眠とクスリで、どうにか風邪は、マシになった。とはいえ、声が出ないので、とりあえず、もう一日休むことにした。メールで同僚の御堂筋に、連絡しておいたので、うちの課長にも話は届いているだろう。ここんところ、インフルエンザが蔓延しているので、休んでも文句は出ない。順番に、ひいているから、三日四日はダウンしているからだ。

「何もすんなよ？」

「おうー」

「昼飯は、冷凍うどんな？ コンロに置いてるから、昼ごろには溶けてると思うんで、それを食べ。それから晩飯は、なんか買ってくる。遅くなったら、作ってあるお粥で凌いどいてくれ。」

「おうー」

俺の嫁は、スーツに着替えつつ、ドタバタと暴れている。昨日はぐっすりと寝ていたから、体調はいいらしい。こちらも熱は、ほとんど下がっているから気分的には楽だ。とりあえず、具合がいいようなら買い物ぐらいは行こうと思っている。俺は、まだ、あんまり食えないからいいのだが、俺の嫁がスタミナ切れするといけなから、トンテキでもするかと考えていた。

「花月つつ、聞いてるかぁーっつ」

「おうー」

「今日ははよ帰るからっつ。」

と、飛び出していった俺の嫁だが、結局、午前様で戻ってきた。

そんなに忙しい時期でもないのに、おかしいなーと思っただが、仕事のことは、あまり聞かないようにしている。お互い、職場の愚痴は言わないのが暗黙の了解ごとだからだ。

以前、俺が上司の愚痴ばかり零していたら、「俺に聞かせることか？」と、俺の嫁に質問されてしまった。確かに、あまり聞かせていいものではないし、愚痴ってばかりの旦那なんて幻滅されそう。聞かされても解決策もないものなんて、相談しているわけではない。ただ、負の言霊を嫁に浴びせているだけだ。嫁が怒るのも無理はない。それに、俺の嫁は、そういうことは何も言わない人間だった。

だから、あれから、職場の愚痴は一切口にしないことにした。嫁からも聞いたことはない。でも、ちよつと心配になった。

「なんかあつたんか？」

「いや、なんでもない。あほがいろいろとしかしよるんや。すまん、遅くなつて。」

買い物して料理したものを食卓に並べたら、嫁は少し困った顔をしてから、「おおきに。」と、笑った。

「明日から復帰するんで、リハビリや。」

「高野豆腐とマメの卵とじって春やなあ。」

「せやなあー野菜の季節は先取りやからな。とりあえず、これ食べ  
て、おまえは風呂入り。」

「・・・うん・・・」

「前にも言ったと思うけどな。俺は、無理して、おまえが働くんは  
反対や。おっさんへの礼やっというても、もう十分や。せやから、  
おまえ、専業主夫になってもええねんぞ。」

毎晩のように残業している姿を見ていると、ついつい、そう言っ  
てしまう。確かに、水都は人よりは稼いでいるが、俺も稼いでいる  
から、別に、貧乏ではない。無理してひっくり返る前に辞めて、バ  
イトでもしてたらええと、俺は再三再四勧めている。高校生の時に、  
水都は年齢を詐称してバイトで入った会社に、いまだに勤めている。  
その時に、年齢のことを黙っていてくれたのが、堀内というおっさ  
んで、いろいろと世話になったらしい。だから、その世話になった  
礼も兼ねて、水都は、多少、仕事がきつくても、そのまんま働いて  
いるのだ。それだって、もう足掛け十五年以上も働いているのだか  
ら、お礼奉公も終わっていると、俺は思っている。

「せやな。専業主夫もええかもな。」

「なんだか疲れているらしい俺の嫁は、そうぽつりと呟いて、春ら  
しいおかずを口にした。」

## それに

結局、看病をしたのは病院に連れて行っただけだ。風呂に浸かりつつ、ふうと息を吐いた。

「水都、溺れる前に出てこいよ。」

外から声がして、物音がした。着替えを用意してくれたんだろう。それから歯磨きをしている音がして、また無音になった。すっかりと体調が戻った同居人は、いつものように動いている。こういう時は、ちゃんとしなければ、と、意気込んでいたのに、仕事が予測しないよう転がって、世話どころではなかったからだ。

本日も、本当なら夕方に帰るつもりだった。だが、出社したら、部下三人が病欠で休んでいた。わかりやすいサボりだな、と、思ったものの、今まで自分がやってきた仕事だから気にせず、手を付けた。とはいうものの、それらの仕事が増量したら、いつもの仕事に食い込むわけで、部下が入る前の通常帰宅時間になってしまった。

「…………たかだか、叱っただけでこれかいな…………」

仕事について叱っただけで、サボられるのか、と、俺はびっくりしたのも事実だ。仕事さえしてくれたら、俺は、別に気にしないが、それができないから叱ったのに、それでへそを曲げられたら、どうしたらいいのかわからない。

「…………向きじゃないからな…………」

とりあえず、出て来ないなら、以前のような仕事の段取りに戻ればいいのか、と、結論した頃に、乱暴に風呂の扉が開いた。

「おまえは、何度言ったらわかるんやっつ。もう出るっつ。」

乱暴に風呂から引き上げられてバスタオルを頭からかぶせられた。さっさと着替えて、居間に顔を出したら、なんで、風呂上がりに・と、文句を吐きつつ、俺の旦那は温かいお茶を入れていた。

「梅ほうじ茶。ほんで、これ、飲んどき。」  
「なぜだか、旦那の病院から貰った薬を差し出された。」

「え？」  
「うっかりしとったけど、おまえ、絶対に移ってるから。予防しとくにごしたことはない。」

「そうか？」  
「俺の看病して、一緒に寝たやる？ あれは、まずい。」

「うーん、そうかなあ。」  
「なんでもええから飲め。」

心配性な旦那なので、予防したいらしい。ひいてからでもええやろうと俺は思うのだが、いつものことなので気にしないで、梅干の入ったお茶と薬を飲んだ。

「どうにか持ち直したわ。」

「おう、早かったな。もつと長引くかと思たわ。」

「初日に盛大に熱出したからな。まだ、ちよつと喉はいがらいわ。おまえも、喉が変やったら早めに言いや。」

「はいはい。」

いつものように返事したら、花月は困ったように笑って、「まあ、ええわ。」と、頷いた。

「おまえの世話は、俺の専売特許やしな。俺のほう及早よ気付くから、おまえは、いつも通りにしとったらええわ。……明日は、なんか食べたい物あるか？」

「うどん？」  
「……もうええ。寝よか？」

「食べたい物と言われても、俺にはない。一番食べやすいものが、麺類だから、簡単そうなものを言っと、花月は、首を横に振った。」

深夜残業が三日続いて、それから二日、俺の嫁は、やはりというか、当たり前というか潜伏期間を消化した頃に、熱を出した。わかりやすくインフルエンザなので、俺と同じように病院へ連れて行き寝かせておいた。

これと違って、看病することもないので、俺は半休だけして、出勤したものの、うっかりと嫁の職場へ休みの連絡をするのを忘れていたことに気づいた。職場についてから、連絡をしたら、「わかりました。」という女性の素っ気無い声で言われて電話を切られてしまった。

俺は、あまり嫁の仕事について詳しくはないが、以前、堀内のおっさんから説明されたところによると、嫁が近畿圏店舗の半分の経理と資金繰りを担当しているという。全てを一人でやっているわけではないが、統括しているのは嫁で、かなりの金額を動かしているらしい。それで、そういう重要なヤツが休んで、あの程度で、済むのが不思議だ。

・・・いや、部下が入ったとか言うところから、それでなんとかなるのかな？・・・

二日三日なら、それなりに対応できるのかもしれないと思いついて、俺も、その件は忘れてしまった。

定時上がりで家に帰っても、俺の嫁がダウンしたままだった。仕方がないだろう。疲れていたところへ悪性の菌に暴れられたら、誰だって動けない。クスリで熱は下がったのか、ちよっと呼吸は楽そうだ。

「ただいま。」

「……うー……」

「着替えたら、おまえも着替えさせたるから、ちよと待つとけ。」  
服を着替えてから台所へ行ったら、出て行った時と、まったく変わらなかった。具合がよければ食べると、お粥を用意したが、ここまで這ってくる根性もなかったらしい。枕もとの飲料水は減っていたから水分だけは補給している。いちいち、こんなことで怒る気はない。

お粥を温めなおして卵を放り込んだ。それから、冷ます。とてつもない猫舌な嫁は、湯気が出ているだけで警戒する。だから、人肌程度まで冷ます必要があるのだ。

熱いタオルで身体を拭いて、着替えさせたら、えふえふと咳をする。咳止めに、大根はちみつを飲ませて、飯を食わせた。

「ほれ、口をあけ。」

食べる気のない嫁は、ぐったりベッドに倒れたままだ。いつものことなので、そのまんま、レンジで冷ました粥を口元に運ぶ。これは、意外と楽しい作業だ。

「……う……」

「なんでもええから。……はい……はい……梅干もはい。」

「……うー……」

「唸っとなるんやったら、もう一口。ほんで、クスリ。」

一連の作業が終了すると、やれやれと俺は食器を下げる。それから、自分も食事して、風呂に入る。

……あの様子やったら、二日ぐらいで復活かな……

風邪とか過労とか、いろいろとダウンする俺の嫁なので、だいたいの復活までの時間もわかる。早めに予防したり、病院に連れて行けたから、復活も早い。いつもこうなら楽なのだが、普段は隠しやがるので、後手後手に回る。または、復活しかけた嫁を、うっかりとつか欲望のままに、というか、俺がダウンさせてしまうので、一度のダウンで一週間が通常だ。今回だって、一ヶ月ぐらいご無沙汰しているので、ちとやばい。

・・・で、おまえは空気読めへんのよ、水都・・・・・・・・

いつもは、一人で寝ているくせに、こういう時だけ一緒に寝たがるのだ、俺の嫁は。さすがに、あんなにぐったりしていると、俺も気を遣うのだが、足を絡ませられた日には理性が崩壊する時もある。

・・・いや、今夜はまずいやろう・・・

風呂から上がって、様子を覗いたら、案の定、俺の嫁は潤んだ目で、手を差し出した。

「・・・うー・・・」

「かまへんけど、足を絡ませたりキスしたり胸を揉むなよ？ 水都。介護老人並みの身体にさせてまうからな。」

「・・・う？・・・」

「いや、無意識にやってるんやろうけどな。てっつ、おまえ、言うてるしりから、それをやるなっつてっつ。」

なぜ、病人相手に理性の限界の修行をしなければならぬのか、それが、かなり厳しいのが、俺には不可思議だ。当人は無意識に、俺に擦り寄ってくる。普通に密着するぐらいなら、俺だって我慢できる。だが、無意識の俺の嫁は、いきなり、パジャマのボタンを外してみたり、触らんでええところを、ちょこちょこ触ってくる。

・・・頼むわ、ほんま、そんな積極的なのは、元気な時にしてく

れや・・・

動きを封じるために、ぎゅっと抱き締めて、トントンと背中を叩いた。クスリは効いてくるから、しばらく押さえ込んでいたら、俺の嫁の身体は、くたりと力が抜けた。

・・・危なかったわ・・・

やれやれと、俺は、ボタンを嵌めなおし、もう一度、抱き締めるようにして目を閉じた。

うちの会社は、本部が中部地方にあるが、一応、近畿エリアを統括するのに、支店がふたつある。その下に、営業所というか遊技場と  
言うか、そういうものが、存在する仕組みだ。

「助かりました。おおきに。」

統括している支店の面倒を手助けしてもらった俺は、所属していないほうの支店長にフォローの礼は入れた。インフルエンザだと自覚した瞬間に、メールでヘルプの依頼を送っていた。日々の売り上げの日計や報告は、後からでも、どうにでもなるが、資金繰りは、そうはいかない。高額の金銭が出入りするので、金が尽きる事態は問題だからだ。何かで数日出てこられないという事態の時は、とりあえず、俺の担当エリアからの資金繰りの依頼を、もう一方の支店のほうで、処理してもらうことにしている、逆もまた然りで、俺が立替で資金を送り込むこともある。数日なら立替で、どうにかなる。それらの清算をして、それから、資金の循環をチェックする。チェーン店がたくさんあるので、統括地域内で、資金が流れていけば問題は無い。どっかが赤字で現金持ち出しでも、どっかで、その分、黒字であれば問題にはならない。それが、チェーン店の強みでもある。

「いやいや、うちのほうも倒れたら頼むわ。」

向こうの支店長は、以前、こちらにいた人なので、割と気安く頼める。向こうも堀内のおっさんの部下だったからだ。

連絡を終えて、そろそろ本日業務に入ろうかと思ったら、うちの支店長が呼んでいると、部下その一が呼びに来た。うちの支店長は俺より、かなり年上だが、俺よりは後で入社したおっさんだ。仕事の区分としては、お互いに接点はないので、呼ばれることなど稀な相手だ。

「きみの勤務態度は目に余る。」

「はあ？」

支店長室に入って開口一番が、これだ。俺の背後には、俺の部下達が立っていて、クスクスと笑っている。部下に八つ当たりで怒鳴り散らしているのだの、無断欠勤したのだの、言いがかりとしか思えないことで、くどくどと小言を言われるに当たって、どうも、支店長と俺の部下が共同戦線で俺を排除したいと画策しているらしいと気づいた。

「それで、訓戒は終わりですか？」と、小言が切れたところで、尋ねたら支店長が激昂して、「おまえなんかクビだっつ、クビっつ。」と、言い放った。

……いや、俺、あんたの部下やないし……

内心で、そう思ったが、支店長の続く言葉にカチンときた。

「この不況の世の中で、おまえみたいなぼんくらは再就職もままならんだらう？ クビになりたくなければ、今後は大人しく働くことだ。」

いや、ボンクラはいいのだ。実際、そうだから。ふと、俺は、これまでの人生で生活の為に働いている自分の履歴を思い浮かべた。学費と生活費を稼ぐのに、仕事をしていなかった時期は、高校時代からない。自分で自分の生活を支えていなければならなかったからだ。大学は、親からの要請で入ったので、入学金とかの最初の分は支払ってくれたが、そこからは断った。あまりにも自分と親の関係が普通ではないことには、当の昔に気付いていたので、大学へ入ることを期にして、縁を切ることに自分で決めたからだ。だから、毎日、大学とバイトで精一杯の状態で、四年間を暮らして、そのまゝ、そのバイト先へ就職した。正直、辛いこともあったし、もうちょっと楽な仕事はないかと考えたこともあったが、日銭が切れると、途端に生活できないという状況では、おいそれとバイトは切れなかった。

ただ、大学生活後半に花月と知り合ってから、少し、その生活は変わった。それまでの生活に、花月が、いろんなものを運んでくれたからだ。

・・・ははは、俺、ひとりやないねんなー・・・

そう思ったら、肩の荷がなくなった気がした。かなり理不尽な目に遭っても、仕事をやめられなかったのに、今は、簡単にやめられるのが、嬉しいと思う。

「じゃあ、やめます。・・・引継ぎは、どないしますか？ 支店長。」

「なに？」

「いや、俺の仕事の引継ぎせんとあかんでしょ？」

「そんなもん、女の子らがあるからいらん。」

こいつらがやっていたのは、一番簡単な仕事だけなのだが、と、反論するのも面倒で、「では、机の整理して帰ります。」と、頭を下げて、支店長室を出た。

携帯で、堀内のおっさんに、「クビになったから。引継ぎも拒否されたんで、後はよろしく。」と、連絡したら、えらい剣幕で叱られた。

「おっおまえ、近畿圏を混乱の渦にするつもりか？ おまえの人事権は、わしが持つてるやんけっつ。誰が、みっちゃんをクビにしたっつ。」

「支店長。でもな、おっさん、俺、ちょっとゆっくりしたいと思うねん。花月が前から、そう言うてたし・・・俺、あいつの嫁やから、嫁らしいことかもしれないな。」

この前の風邪の時に、つくづくと自分の忙しさには嫌気がさしたあんな時くらい、もっと、旦那の世話ができる状態でありたいと思っただ。さすがに専業主夫というわけにはいかないだろうが、今よりは時間を作れるだろう。しばらく、堀内のおっさんは沈黙したが、なんだか笑っているような声になって口を開いた。

「・・・まあ、ええわ。ほんだら、しばらくは遊んどけ。・・・みっちゃんが、そんなことを言うようになるやなんてなあー、わしも年とったわ。」

「おい？」

「まあ、よろし。また連絡するから、それまで、新婚ごっこでもしとけ。あのあほとな。」

「いや、おっさん？」

退職の挨拶をするつもりだったのに、堀内のおっさんは、勝手に電話を切ってしまった。確かに、俺の人事権は直属の上司である堀内が握っている。この支店に席はあるが、所属はしていないのだ。

だから、堀内のおっさんが、「うん」と、言わなければ、俺は解雇ということにはならない。だが、支店長が、どういう方法を考えるか、わからないが、何がしかの罪状でもつけて上に報告すれば、いくら、堀内でも頷くだろうと、俺は甘いことを考えていた。

机の整理をして、自分が使っていたパソコンのデータを、綺麗さっぱり消去した。必要なデータは、一応は残してあるが、それは、パスワードが入用なものばかりだ。パスワード設定をしたのは、堀内のおっさんなので、解除コードは、関係者なら誰でも知っているものだ。

長年愛用していた筆記具は、全てが会社支給のものだから持ち帰るものはない。強いてあげれば、机上辞典とかいう辞書ぐらいだ。これらは、正式に入社する前から使っていたものだから、寄贈しておくことにした。個人的な住所録だけ紙袋に放り込み、後のものはゴミ箱へ投げ入れて、元から物の少なかった机は、綺麗に整理できた。

何事だ？ と、部屋の人間は驚いていたものの、声をかけるものはない。これ幸いと、俺は紙袋をひとつ手にして、会社を後にした。

まだ、午前中で、慌てて帰ったところで用事はない。せっかくなので、ぶらぶらと街を散歩した。久しぶりに、古本屋街をひやかして、のんびりと昼飯に明石焼きを冷まして食った。今日から自由の身と頭は理解しているのだが、心が追いつかない。今まで時間に追われている生活が常だったから、何をしても良い状態というのに馴染めないのだ。

……いや、こついうのは初体験やなあー……

授業をサボったことはあるが、何日も自由になるなんてことはなかった。晚ごはんの買いだしもおこつと、デパ地下へと降りて賑やかな宣伝で、明日が愛の告白デーだと判明した。とはいっても、さすがに、そんなイベントをやるほどに若くはないので、そこは無視して、惣菜売り場へと足を向けた。

あれ？ と、俺は自分の家に灯りがあることを目にして慌てた。

俺の嫁の風邪が、ぶり返して、早退でもしたのかと思ったからだ。

しかし、部屋に飛び込んだら、台所から煮物のいい匂いがして、「

おかえり。」 という穏やかなトーンの声に迎えられた。

「珍しい。」

俺より早く帰るなどということは、滅多にあることではないので、

そう声をかけたら、困ったように俺の嫁は笑って、「無職になった。

」と、漏らした。

「ん？ ムシヨク？ それは、あれか透明とかさういう……」

「ああ、無理にボケンでもええで、花月。クビ。I a m f i r

e . . のほうやから。」

「おお、そうか。くくくく……まあ、ええやないか。し

ばらくゆつくりしとつたらええわ。」

何かあってブチキレたかなんかで、辞めてきたのだろう。別に、

俺は、それでもええ。ちよつとゆつくりして、また働き口でも探し

たらええわ、と、内心で呟いた。

「これから、家事は任せてくれ。」

「おお、専業主夫か？ ええがな、ええがな。『おかえり、あなた』で、お出迎えのキスを頼むで。」

「あほか、おまえは。とりあえず着替えてこい。」

「おかず、何？」

「キンメの煮たのとサトイモの煮物。」

誰かが待っていてくれる家に帰れるのは嬉しい。俺は、そう思うから水都に、その環境を提供していた。だから、俺は、自分が、それができるのなら、嫁が専業でもええと思う。まあ。家賃とか考えたら、バイトくらいはしてもらわなあかんけどさ。

俺の嫁 専業主夫化で、二日目もゆつくりと始まった。朝が弱いので、朝飯に関しては俺が作るようになってる。

「すまん。」

「いや、別に……後で、『行ってきますのチュウ』とか希望。」

「あーうん。」

寝惚けた俺の嫁は、意味がわからないままに返事して、また目を閉じている。気が抜けたと、昨晚、水都はこたつで寝転がっていたので、これ幸いと襲ったのは俺だ。これからは気兼ねなくできるな、と、耳元で囁いたら、蹴りを入れられたが、拒否されることはなかった。ので、了承と考えて先に進んだのは言うまでもない。で、そうになると、俺の嫁は起きられなくなる。

朝から大層なことをする必要はないので、いつも通りに、バターを塗ったトーストと、目玉焼きぐらいを準備して、俺は早速食べた。いつもなら、ぐたぐたと呪いの言葉を吐きつつ起き出すのだが、今からは起きる必要はない。さっさと食って洗濯機を回して、俺ものんびりと新聞を読んだ。

・・・優雅なもんや・・・

いつもなら、先に洗濯機を回して出勤前に干していくが、それは、専業主夫にお任せしたので、ゆとりがあるのだ。

「そろそろ出るか。」

テレビで時間を確かめて、嫁の部屋に顔を出した。

「水都、行って来るわ。・・・洗濯もん干しといてや。」

「うー。」

「いやあー奥さん、そんな色っぽい声ださんといて。会社へ行きたくなくなるやんか。」

「・・・あほ・・・行って来い。」

布団に埋もれたままの水都の腰の辺りを、ぼんぼんと叩いて部屋を出た。出会ってから、ふたり共、バイトしていたり就職したりで、こんなにゆつたりと会話することもなかったから、新鮮でしかたがない。

定時上がりで帰ったら、食事も風呂もできていて、「おかえり」

の出迎えもある。食後のデザートだと、俺の嫁が、コーヒーと共に黒いケーキを、こたつの上に載せた。もちろん、甘い物が苦手な嫁は、レアチーズケーキだ。

「デザートまで付くなんて、すごいなあー。」

「なあ、花月。おまえ、顔が緩みまくってるけど大丈夫か？」

「いやーなんていうか、もう、ほんま。なんか嬉しいてな。あかんねん。」

「えーっと、今日のおかずがよかったとか？」

「それもあるけど、万事が万事嬉しい気分なんよ。家に帰ったら、

誰かがおるってというのは、ええ。」

ついでに、こっそりというか、ひっそりというか、チョコがイベント当日に現れるのもいい。いつもは、コンビニの売れ残りを叩きつけられる。それも日付ギリギリとかで、喜ぶ間もない。照れ屋な俺の嫁は、平静を装ってはいるが、実は緊張している。こっそりとバレンタインのチョコをケーキで贈っていることに気づかれないか、ひやひやしている。

「ええ、ほんま、俺の嫁は最高や。」

「お世辞はええから、はよ、食うて寝る。」

「くくくくく……俺、おまえのそっつうところが好きやわ。」

「あつそーかーおおきにありがとさん。」

「その棒読みにまで愛を感じるし。」

「花月、それ以上言うたらしばくから。」

ばくばくと、自分の白いケーキを丸呑みして、さっさかと、嫁は逃げた。そんなに照れることもないだろうと言っつのに。

洗濯物を畳んでしまうと、家事もひと段落する。やれやれと読みかけの小説を引っ張り出して、それに目をやる。溜まっていた本も着々と消化中で、なんだか、あまりにも平々凡々しておかしくなる。

もしかしたら、と、気にしていた職場からの緊急連絡もないので、すっかりと気抜けした状態だ。まあ、堀内のおっさんに連絡してあるから資金繰りなら、本社からでもできるだろう。

……落ち着いたら、バイトはせんとあかんあー……

ただいまは、貯まりに貯まっていたはずの有給休暇のはずで、月末に給料が振り込まれたら、それで完全に縁が切れる。それまでは、ちよつとのんびりしていようと思っっているのだが、問題は次の職場だ。

専門バカというか、長いこと、同じ職種にいたので、それ以外に、どんなことができるか、いまいち、自分でもよくわからない。できれば、同じような商売に、と、考えていたのだが、それには、ちよつと問題がある。

というのも、俺の旦那が、俺が出迎えることに異常にはしゃぐからだ。そして、「もう無茶な仕事はせんでもええ。なんなら、もうちよつと家賃の安いところへ越してもええしな。」と、留めの言葉を吐いた。

つまりは、俺の旦那は、家に俺がいることを望んでいるということだ。まあ、そりゃそうかもしれへん、と、同居してからの状態を考えると頷けるものがある。深夜残業なんて当たり前。土日も忙しければ休日出勤。ゆっくりするのは、年末年始ぐらいという過激な生活態度だった。

その生活を支えていたのが、花月のほうだ。家事全般を請け負って、へろへろの俺が胃潰瘍にも肝炎にもならず、どうにか働いていたのは、そのフォローがあつてこそそのことだ。

……とりあえず、家賃の負担分ぐらいは、どうにかしとかんとな……

当座の生活費には、なんら問題はないが、もし、俺が本格的に専業主夫化したら、やっぱり家計は厳しい。交通の便がいいので、このハイツの家賃は、それなりに高い。朝から夕方までのバイトを探して、ちまちまと稼げば、どうにかなるだろうかと、俺は考えている。今までの給料が破格だったから、生活費を、こちらで負担し

ていたから、それがいきなりなくなったら、さすがにまずいだろう。

・・・でも、できたら、花月の希望は叶えたいんやけどなあー・・・

土日祝日が休みで、定時上がりができる仕事なんて、そうそうあるもんでもないだろう。それならバイトでも同じだ。だが、それだと実入りも悪くなるわけで・・・はてさて・・・どうしたもんじゃるか・・・

本を読んでいるつもりで、窓から見える空を見上げていた。引越してもええかな、とか思い直して、また本の字面を追ってみる。

・・・もう少ししたら買い物に行こう。チラシのチエキを買おて、それから、クリーニング屋も寄ってこなあかな。・・・あいつの職場に、もうちょっと近いところに引越したら、どうやるう？あっちは田舎やから家賃は安いはずやしな・・・

やっぱり、字面を追っているつもりで、空を見上げていた。

「あかんわ、俺。動こう。・・・どうも止まると、余計なことばかり考える。」

文庫本を閉じて立ち上がった。

外へ出たものの、時間も早いから散歩がてらに遠回りをした。見知らぬ公園に行き当たって、そのベンチへ座り込む。さすがに寒

い時期だから、人気はない。鳥の囀りが、樫の木から聞こえてくる。

・・・なんていうか、長閑や・・・

自覚なく笑っている自分に呆れた。こんな時間があるのも、旦那がいてくれればこそや、と、思ったら、やっぱり引越しかと決めた。

## そのさん

意外なことに気づいたのは、俺の嫁が専業主夫化して一週間後のことだ。朝は、見送るにしても、パジャマなのは致し方ないとしよ。しかし、夕刻の帰宅時間まで、そのまんまであって、さすがに寒いのか、ジャージの上を羽織っているというおかしな格好であることが、日常茶飯事であるということに気づいた時だ。

「あんな。つかぬことをお尋ねすんねけどな。」

「おう。」

「おまえの服って、それしかないんか？」

「え？ 毎日着替えるほどには汚してないからやけど？」

「いや、買った物は何を着ていくんや？」

「この上にジャージでコート。」

よくよく考えたら、こいつの衣服について考えたことはない。思わず、嫁の衣装ケースを開けたら、スーツとワイシャツが、ほとんどであることが判明した。後は、俺と出かける時に穿いているジーンズと、ニットのセーターが二着だ。

「何んかあるか？」

「いや、おまえ、これって……」

「今まで、家ではパジャマとジャージだったからな。別にええやろ。」

「いや、かまわないのだが、あまりにも、毎日、同じ格好をしているのは、どうかと思う。ていうか、やっぱり、自分には興味がないのだ、俺の嫁。」

「出かける。」

「ちょうど、土曜日の午後だ。近くのユニクロかシママムラあたりなら、それほど財布は傷まずに、何点かは買える。」

「どこへ？」

「怪訝そうな嫁は首を傾げているが、とりあえず、セーターとジーンズ」

パンを、そこから引つ張り出して手渡した。

「俺の嫁の服を買う。」

「え？ 家におるんやから、これでええやないか。」

「あかんっつ。ちゃんとした格好もしくは裸にフリルなエプロンで俺を出迎える。」

「はあ？ フリル？ それは、おまえ、気食悪いと実証したったやないか。」

以前、同僚の彼女がプレゼントしてくれたエプロンで、あまりにも似合わないことは実証した。だが、それとこれは別だ。

「だから、ちゃんとした格好で迎える。」

「そんな面倒な。」

「わかった。俺がちゃんと準備したるから、毎日、それを着ろ。」

確かに、普段着なんてあまり持っていないものだが、こいつのは、ひどすぎる。仕事の時間が大半だったから、スーツ以外のものを着ることが少なかったけど、一週間、同じパジャマはないだろう。ていうか、洗濯しようよ、俺の嫁。

「パジャマも三着買う。」

「もつたいない。」

「三着を一週間ローテーションするように。これは、旦那の命令じやっつ。」

専業主夫になっても、自分に興味がないことに変わりはないというところを痛感した俺は、毎朝、毎晩、嫁の服装を整えるという用事が増えた。掃除と洗濯がなくなったから、配分からいえば楽なものだが、ついでに、昼は弁当にすることにしたので、朝は、弁当も作ることになった。これは、嫁が面倒だと昼飯を食わないことが判明したからだ。

.....まあ、ええけどな。.....

朝から弁当を詰めつつ、俺は苦笑する。どうしたって、嫁の世話

は俺の仕事には違いなからだ。ベッドの足元に、本日の着替えを準備して、台所に弁当箱を置く。どうも気が抜けてしまった俺の嫁は、朝は寝坊するようになった。しばらくは、自堕落な暮らしというのを堪能したらええ、と、俺は思っている。今まで、そんなことしたこともないのだから、遅ればせながら、そういうものを楽しむのもいいだろう。

きちんと目が覚めるのが、最近では九時過ぎで、のそのそと起き上がる。ベッドの足元には、きちんと畳まれた服が置かれていて、湿々ながらも着替える。それから、コーヒーを砂糖入りで飲んで、洗濯物に取り掛かる。まあ、そうはいつても、ぼちっと、ボタンを押しただけで、脱水まではお任せだ。

とりあえず、食卓の上にあるものを眺めて、それから、タバコをふかしつつ新聞を読む。

・・・そりゃ、専業主婦になりたがるわけだよな・・・

なんとも長閑な時間がある。掃除といっても、子供やペットがいるわけではないから、汚れることはない。適当に、掃除機をかけて後は、目立つところだけ雑巾で拭くぐらいのことだ。

食卓には、ラップされた朝飯があつて、ついでに、横には、可愛いキャラクターが描かれた弁当箱がある。俺は、それだけで、とても疲れた気分になる。

先日、面倒だから、朝飯しか食わないことがバレて、百均で俺の旦那が買ってきた弁当箱だ。それほど食べないから、小さいのがよかったのだが、小さいのは、どれもキャラクターものの弁当箱だったらしい。当人は、大きなサイズの普通のものだった。毎朝、ちま

ちまと弁当を作り、花月は出勤する。まあ、野郎の作る弁当だから、のり弁当とかうめぼし弁当に毛が生えた程度ではあるが、手間ではあるだろう。

「食ってなかったり、そのまんま捨てた場合は、俺の前で一人エツチ公開っつ。」

あほなことを叫んでいたが、あれは本気だ。長年付き合っているので、本気が嘘かくらいはわかる。怒ると容赦しない男なので、それだけは勘弁だと、大人しく食べている。

「でもな、俺、朝飯食って、昼飯食うなんて芸当は難しいんやけどなあ。」

働いていた時ですら、一口二口しか朝は食べなかったし、昼飯だって麺類で済ましていたのだから、二食をまともになど食べるはずもない。朝飯を昼に食って、弁当は、三時のおやつに無理に詰めている。それでも、確実に体重が増加しそうに苦しい。

・・・マメ過ぎて、涙出るわ・・・

洗濯物を干し終えて、仕方なく朝飯に手を出す。

びんぽーんびんぽーんびんぽーんびんぽーん

「誰じゃあつっ、人んちでピンポンダツシユしとるあほはっつ。」  
「がながんと鳴らされる呼び鈴に、怒鳴りつつ玄関を開けたら、とんでもないのが立っていた。」

「・・・え?・・・」

「よおう、みっちゃんっつ。久しぶりやなあ。さあさあ、おっちや

んとメシでも行こうやないか。」

「・・・う・・・え・・・常務ううう?・・・」

「そうそう、常務の沢野のおっちゃんやでえ。」

俺の働いていた会社が合併する前は社長だったおっさんだ。合併して、常務になったものの、経営しているのは実質このおっさんだったりする。ついでに、堀内のおっさんが専務で、表向きには、堀内のおっさんのほうが地位が高く見られているが、実は、代表権を持っていないだけで、沢野のおっさんが現在の会社の経営全般の舵取りしているので、俺からすれば雲の上の人だったりする。昔は、同じところで働いていたが、会社が合併して本店が中部になった段階で、代表取締役を合併した相手の会社の社長に譲る形で、補佐役として本店に移動したので、それからは、ほとんど会っていない。

「なんで、あんたが、ここにおるねんっつ。」

「みつちゃんの顔を拝みに。」

「あんた、本社におるはずやろっつ。」

そう、本社で、ふんぞり返っているはずのおっさんだが、フットワークが軽いので有名だ。お忍びで各店舗の視察なんぞやらかす悪魔のようなおっさんでもある。しかし、こここのところは、中部地域の梃入れとかで、あつちばつかりを飛び回っていたはずだ。

「いやあーみつちゃんがゆっくりしてると聞いてなあ。ほら、いつも、堀内がわしの邪魔ばかりして、みつちゃんに会わせてくれへんかったから押しかけてきたわ。」

あははははは・・・と盛大に笑って、おっさんは、俺の手を掴まえる。外でメシでも食おうというのだが、そんなことをして、弁当を残したら、俺はとんでもない罰ゲームを受ける羽目になる。

「悪いけど、メシあんねん。」

「ほおか、ほな、おっちゃん、駅前で弁当を買おて来るわ。」

「いや、それやったらある・・・ていうか、今更なんの騒ぎやねん? 俺はクビになったはずやで?」

「クビ? ほおう、みつちゃんがクビなあ。本社の人事部では、み

「つちゃんは、リフレッシュ休暇でお休みになってたけど？」

「そんなもん、うちの会社にあるかいっつ。」

「規定はある。誰も使こてなかっただけや。まあ、ええ、メシ食いながら話そうやないか。」

「このおっさんは、堀内のおっさんに輪をかけて喋りの達者なおっさんだ。そそくさと、玄関で靴を脱ぎ、さつさと上がってしまった。」

居間へと勝手に上がりこんだ沢野のおっさんは、おお、ええもんがある、と、こたつに、どっかりと腰を下ろした。こうなると、食べないと動かないだろうから、俺も追い返すのは諦めた。堀内のおっさんほどではないが、このおっさんにも、いろいろと世話にはなっていた。

「沢野さん、うどんとインスタントラーメンと、どっちがええですか？」

「そら、うどんやろう。」

俺用の弁当では、絶対に足りないだろうと、追加メニューを尋ねたら、関西人らしく、うどんと言った。冷凍庫から冷凍うどんとねぎを取り出して、適当に卵とじうどんを作り、それと弁当を差し出した。

小さくて可愛い弁当箱を、じつと、おっさんは眺めてから、「バクダン小僧は元気そうやな？」と、笑った。食事に無頓着な俺が、これを作るわけがないことを、沢野のおっさんも知っている。

「元気です。マメすぎて、俺はメタボにならへんかが不安ですわ。」

俺は、トーストと朝飯のおかずと野菜スープを、こたつに載せて、本音を吐いた。家でくたぐたしているだけなので、そこまで世話されんでもええと思っっている。

「いやいや、おまえは、それぐらいで、ええこっちゃろう。おーおー、ええがな、ええがな、この卵とじ。ほな、いただきます。」

小さな弁当箱から、メシをつまみ、えらい勢いで食事を始めてしまったので、俺もとりあえず口をつけた。まだ、あんまり腹は減っていないのだが、となりで、がつがつと食われたら、吊られてしまった。

全部きれいに食べ終わると、沢野のおっさんは、携帯で電話して、「美味しい和菓子を持って来い。生のやつやぞ。」と、怒鳴って切った。

「誰か来てるんか？」

「一応、秘書と運転手はついてるで。」

「それやったら、メシなんか食ってんと用件済まして帰ったらよかつたんや。」

「何を言つとるんや、この子は。みっちゃんの顔を見に来たんやから、こんでええんや。だいたい、用件はそれだけや。」

「そんなもん信じられるか。」

このおっさんが、そんなことで来るわけがない。俺がやっていた仕事は、ある意味、丸秘事項に携わっているから、口止めか、辞める際の念書でも取りに来たはずだ。けっして、外部に漏らさないという念書とか、下手すると、この業界からの追放とか言い渡されると、俺は思っていた。それぐらい、金を捌く仕事だったからだ。

「この業界は、まともなヤツはおらんよ。だいたい、どっかで下手こいたか、まともには働けへんヤツが来るとこや。」

いきなり、タバコをふかしつつ、沢野のおっさんは、しみじみと言いだした。確かに、俺だって未成年ということを隠して、最初は勤めていた。長いこと、同じ職場にいる人間も少ないし、どこからどう見ても、ヤーさんとしか思えないのがいたりする。そういう職場ではあった。

「本来は、金周りの仕事は身内にさせるんが、この業界の常識や。それが、堀内は、他人に任せる方法を編み出した。いや、みっちゃん、おまえが凄いの、そこ違う。」

堀内のおっさんは、経理関係の人間に借金をさせて、それで管理

していた。逃げて、闇金へ、その証文を売り飛ばすから、逃げられないし、借金があるからサボることもできない。そういう汚い方法だが、それで定着率は格段に上がった。俺も、同じように借金をしていたから、それは知っている。

「俺かて、一緒や。」

「あはははは……ほんま、自分のことはわかってへんで、おまえは。おまえが凄いのな、勤続十年越えて、なお、前借してへんってことや。ついでに、経理も綺麗なもんや。自分にも金にも興味がないから、おまえは貴重なんよ。」

「ああ、それは、堀内のおっさんから叩きこまれたからな。」

事務所にあるものは、金であつても金でない。この金は、勝手に持ち出すと、警察と闇金に追われる匂い袋みたいなもんや、と、俺は叩きこまれた。昔は、ネットで金を動かすのではなくて、現金で動かしていたから、事務所には札束が、ごろごろしていた。

「まあ、教えられても誘惑には勝たれへんのが人間や。ましてや、まともでないヤツは、わかってても手を出す。または、帳簿を改竄してちよるまかすことをする。」

「切羽詰つてたらな。」

何度も、そんな人間は見てきた。そこにあるのが、自分の物だと錯覚するのだ。

「おまえには、それがあらへんから貴重なんよ。堀内は、有給のあるうちは動かへんと胸を張りよつたが、わしは心配やから、ここへこさしてもろた。」

「え？」

指でも詰めさせるつもりか？ と、訝しんだところへ、また、呼び鈴が鳴った。出て見ると、きつちりとしたスーツにメガネの男が菓子折りを差し出して、また、消えた。

届いた菓子折りは、どっかの有名店のものらしく仰々しい箱に入

つていたが、沢野のおっさんは、「さあ、デザートや。」と、乱暴に紙包みを破いた。話が途中だから、仕方なく、お茶を入れなおし、食べた食器を台所へ下げた。

菓子折りは、季節のものを模した生菓子で、梅やうぐいすの形のものや、少し早いのが、雛人形の形もあった。

「おっさん、こんなん食べるんやっつけ？」

「いや、一個でええ。後は、みっちゃんが食べ。残ったら、バクダン小僧にも食わせたれ。」

バクダン小僧という花月の愛称は、過去、あのあほがやったバカ騒ぎが原因で、その当時、事務所に行った人間は、誰でも知っている。もちろん、沢野のおっさんも、そこにいた。

「その愛称はやめたってくれ。人生最大の恥らしいから。」

あまりにも、バカなことをしたので、花月は、そのことを深く恥じている。だから、俺の職場には、何があっても近寄らないほどだ。すでに、あの騒ぎを知っている人間は、あそこにはいないのだが、それでも、トラウマになっているらしい。

「あのバクダン小僧の根性は、わし、大好きやで。」

「わかったから、ほんで、続きは？」

「どんどん脱線されては、話が長くなるので、本来の路線へ強制的に戻した。」

「まあ、そんな調子やったら大丈夫やな？」

「だから、何がやねん？」

「うち以外に就職されては困るから、止めに来たのが本題。貴重なみっちゃんを手放すくらいやったら、あいつら全員を放り出すほうがええ。」

「貴重？ 金に興味がないのか？ そんなもん、どう転ぶかもわからへん。」

もし、花月が不治の病で大金があれば手術できると言われたら、俺は、確実にやるだろう。昔は、ひとりだったから、そんなことはなかったが、今は違う。ふたりになったから、背負うものは半分に

なっただけど、その代わり、何かあつたら、ふたり分になる。

「バクダン小僧がある限り、みっちゃんは大丈夫や。ていうか、おまえ、あれと所帯持ったから、今まで無事に生きてるんや。……ええか？ よそから引き抜きの話が来ても行つたらあかんで。」

「いや、俺は、すでにクビやつて。」

「それはない、それはない。堀内が、ものごつついえげつなあーい仕返しをしたら、すぐに戻つて貰う。」

「いや、あのな、沢野さん。俺、もうちよつとゆとりのある仕事を考えてるから。」

「ああーああー、それも心配せんでもええ。今度は、もつとしつかりした部下を用意するからな。仕事は、資金周りだけをしてくれたらええ。」

ぱくつと、綺麗な緑色の鶯を口に放り込んで、沢野のおっさんは立ち上がった。それから、お茶を飲んで玄関へ歩き出す。

「ちよつ、ちよつと待て、おっさん。せやから、俺は辞めたんやて。」

「ははははは……堀内が、おまえを手放すわけがないやろ。辞めたところで、堀内は諦めへんわ。まあ、みっちゃんが本社に來いひんのは残念やけどな。バクダン小僧は、みっちゃんには必要みたいやから、それは諦めたんやで、あの男。」

あはははは……と、笑つて沢野のおっさんが靴を履いて、玄関から出て行く。慌てて、俺もツツカケを足にひっかけて外へ出たら、黒塗りのベンツが路上に止まっていた。

「堀内が、そのうち現れるから、それまでは遊んどき。ああ、せやせや、おこづかいやろう。それで、ゲーセンでも本屋でも、ソープでも、好きなことしたり。」

財布から抜かれた何枚かの万札を、俺に握らせると、文句を言う暇も与えずに、階段を軽やかに走り降りて、とつととベンツで消えてしまった。

……俺は、ガキか？ ソープって……

まあ、そのうち、堀内のおっさんが来るのなら、その時に突き返そうと、ポケットにしまった。

……やめれへんのかなあー……

あのおっさんが現れたということは、そういうことなんだろうが、まあ、話次第のことだ。どういう話になったとしても、俺のほうも時間的な問題が解決されない限り、辞めるつもりでいる。沢野のおっさんの口ぶりからすると、同業種なら使ってもらえる様子だから、それについては安心した。引き抜いてくれるなら条件は、つけたい放題だろう。

家に帰ったら、こたつの上に菓子折りがあった。甘いものが苦手な俺の嫁が、わざわざ、こんな箱モノを買ってくることはない。

「おかえり。」

「ただいま、誰か来たんか？」

菓子折りを指し示して、そう尋ねたら、「ああ、沢野のおっさんが来たんや。」と、こともなげに俺の嫁は答えた。

「誰や？ サワノって？」

聞いたことのない名前だ。

「元社長で、今は常務。一応、堀内のおっさんの上司かな。」

「はあー？」

「とりあえず着替えてきたら、どないや？ 話やったら、メシ食いながらでもええやろ？」

今夜は刺身とアラ汁やで、と、俺の嫁がおっしゃるので、スーツをさっさと脱いで、ジャージに着替えた。うちは、食事中にテレビ

は見ないし、酒も、あんまり飲まないの、すぐに白メシと味噌汁が並べられる。金時豆が、箸休めにあつて、刺身は鯛とマグロだった。

「なんで、イカはないんよ？ イカ。」

「モンゴしかなかったんや。あれは硬いからな。」

「うわっ、このマグロ、めっちゃアブラあるやんけ。漬けてもよさそうやな。」

「そう言うやろうと思って、冷蔵庫に漬けにしたあるから、後でお茶漬けしたらええわ。」

「おおーさすが、俺の嫁。ツボを心得とるっ。」

ふたりして、適当な会話をしつつ、食事する。別に難しいことではなくて、世間話みたいものだ。しばらくして、腹がくちくちくたところで、「それで？」と、俺は切り出した。

「それだけで、先ほどの話だと、水都もわかる。」

「辞められへんらしいわ。」

「え？」

「沢野のおっさんが他へ勤めるくらいなら、そのままでおれって言いに来た。今度は、ちゃんとした部下もいれて、システムを変えるつもりらしい。」

「で？」

迷っているのか？ と、無言で尋ねる。その言葉に、俺の嫁は、「まあな。」と、肯定した。

「定時上がりできるようにするって言いよつた。それなら、それでええか、と、ちょっと思ったんやけどな。ただな、あのおっさんは口八丁手八丁で有名やから、どこまでが真実なんかが、今ひとつなんよ。……俺としては、花月の世話ができるくらいの時間は欲しいから。」

「いや、それは大変嬉しいんやけど……できれば、おまえの世話をしてくれ。」

「それは、おまえの仕事やから任せるわ。」

死ぬまで生きていればいい、という考え方だった水都は、自分のことなんて、どうでもええと言いつ切る。とりあえずは、俺の世話をすることだけでも感心があるのは、壊れ具合が、幾分かマシになっているということだろう。

「堀内のおっさんが迎えに来るらしい。その時に話を聞いて、納得できる内容なら戻るかもしれへん。あかんかったら、引越す。」

「どこへ？」

「おまえの職場の近く。家賃が安いとこに移る。それなら、俺もバイトするぐらいでええし。……正直、ちよつと怖いんよ。おまえのために金が必要になったら、俺は、なんかしそつやから。」

苦笑するというか、なんていうか、震えるように瞳を伏せて、水都は呟いた。現金を操る仕事だとは聞いている。例えば、俺が大病を患って、莫大な手術費用があれば治ると言われたら、自分は確実に金を盗むだろうと言う。

「なんで、俺が大病？」

「いや、そういうこともあるかもしれへんやん。交通事故とかな。」

「なんで、俺を死ぬ目に遭わすんじゃ、このどあほはつ。そんな心配はいらん。俺は、ちゃんと共済に入ってるし、健康保険にも加入してる。だいたい、この至極健康体の俺が病気なんかあるかあーいっつ。」

ああ、こいつは、俺があつて生きているのだと、その言葉に心が温かくなった。当人は気づいていないだろうが、俺には、熱烈な告白とも取れる言葉だ。ひとりにはなりたくない、と、水都は思っている。十年して、ようやく、その域まで、俺の嫁は達したらしい。

「せやねんけどな。なんか、ふと、そんなこと思った。」

「愛してるで、俺の嫁。」

「意味がわからへん。」

「いや、俺はわかつてるから。おまえの深層心理に愛の告白をかましてるだけ。……まあ、ええわ。おまえの好きにしたらええ。」

せやけど、今までと同じ仕事内容やったら、俺は反対や。それこそ、

夜逃げするからっつ。」

仕事がいやなら嫁を連れて、引っ越せばいい。今より生活が厳しくても、別に俺は気にしない。俺の嫁が、生きてるだけの状態であれば、それでいい。

## そのよん

元々、その計画は出来上がっていたので、さほど問題はない。場所とシステムさえ移行できれば、人員は、すでに確保してある。

「どないすんのや？」

メシを食いつつ、その計画についての細部を沢野と詰めているのだが、それではないほうについての質問を受けた。

「何がですやる？ 沢野さん。」

「とぼけてもあかんで、堀内。どうせ、えげつないことするつもりやる？」

まあ、長いこと一緒に働いている間柄だ。こちらが、やろうとすることも薄々は気づいているのだろう。そして、この男は、それを見越しているのに、確認だけはする。

「いつもの通りにさせてもらいます。ただし、今度は売り払いますけどな。」

「それ、みっちゃんの耳に入ってもええんかい？」

「はははは……あれが、心優しくなのは、あのクソバクダン小僧のためだけや。それ以外は、なんの感情もあらへんがな。」

別に、今までも隠したことはない。戒めるためでもあったが、はつきりと教えてあるし、堕ちて行く人間の経緯を見張らせていたこともある。それでも、顔色ひとつ変えたことはない。

「しかし、わしは驚いたわ。久しぶりに会ったら、えらい表情豊かになっとな。」

沢野は本社勤務になってからは、ほとんど顔を合わせていない。あの頃の水都は、表情も乏しくて栄養失調で顔色も悪かった。

「そら、あんた、十年もかけてな、せつせと、あれを世話したあほの成果つちゅーもんやる？ ……色気まで出させよるやなんて思わなんだ。」

うつすらと頬を染めて微笑む水都など、見られるとは堀内だって

思わなかったし、「花月のために、もうちょっとゆとりのある仕事をしたい。」と、言い出すとも思わなかった。

十年は長いようで短い時間だ。自分が関わっていた高校生の水都は変化しなかったが、大学生の水都は、花月と関わって劇的に変化した。それを悔しいというよりも、寂しいと思うのが親心というものだ。

「あれはあかんで、堀内。みつちゃんは、梶子でも動かんやろう。」  
「わかってるて。せやから、関西統括を組むことになったんやないか。」

水都が、絶対に動かないと言うなら、関西だけでも任せてしまおうと堀内も沢野も考えた。堀内が仕事を完璧に教え込んであるから、今更、その重圧で潰れることはない。そして、今更、欲に目が眩むなんてこともないだろう。本社では、すでに東海と中部は、統括した部門がある。本来は、本社で、関西も統括するのが筋だが、その責任者が動きたくないというなら、こちらでやってもらえば済むことだ。それに、重要な手駒である水都の地位も、少し上げておきたいという心積もりもある。自分たちが信頼して仕事を任せられる手駒の地位が、今までは低すぎた。それというのも、水都が昇進に興味も野心もなかったからだ。だが、それでは、堀内が困る。専務の子飼いの部下が、ただの平社員では、発言権もないからだ。

昔のように郵便とFAXと電話だけでのやりとりではないから、インフラさえ整えば、どこで指示を出していても問題にはならない。「しかし、みつちゃんも強情やな？ まあ、それやから、仕事を任せられるんやけどな。」

強面の沢野や堀内にも、怯えて竦むなんてことはない。はっきりと物を言う水都は、貴重な手ゴマだと、沢野も考えている。だからこそその遠征だった。たぶん、水都が辞めたとわかったら、同業種のものが確保しにくくはわかっていた。こちらの手の内を全て知っている年若い水都なら、情報も引き出せるし、即戦力として申し分ない。そして、金に興味がない。こんな有難い性質の人間を、放

置しておくはずがない。どこの企業も、資金運用の人間の選択には苦勞している。履歴書や興信所の調査でわかるのは、過去のことだけだ。だから、その人間の本質なんてものを見極めるのが難しい。目の前に金が転がっていけば、どうなるのかということとは、なかなかわからないものだ。それが、勤続足掛け十五年で、一度も前借をしたことのない経理がいるとわかれば、どこの企業だって欲しがるというものだ。

「みっちゃんは、動かへんって言うたやろ？ あいつ、ああいうところは計算しよるからな。有給分は、ゆつくりしとるはずや。」

「ああ、そんな感じやったわ。わし、メシに誘たんやけど、お昼ごちそうしてもろた。みっちゃん手作りの卵とじうどんと、バクダン小僧の手作り弁当をよばれたわ。はははは。ああやってたら、みっちゃんも普通の若いもんと変わらへんなあ。」

「え？ おいおい、沢野さん、何してくれてんねんつつ。」

沢野が、思い出し笑いをして、聞き捨てならないことを言い出したので、堀内は立ち上がりながらの勢いで詰め寄った。

「未だ嘗て、みっちゃんの手作りなんて、わし食ったことあらへんぞつつ。あんだけ貢がせといて、その恩恵を、沢野さんが横取りつて、どういうことや？ あー？」

「そこか？ 堀内。たかだか、うどんて、その態度か？」

「当たり前や、あいつは、料理なんてすることあらへんかつたんやつつ。なんでやー！ みっちゃんつつ。パトロンは俺やるんぞおおお。」

「堀内も行ってきたらええがな。どうせ、しばらくは、こつちにおんねんから。なかなか手際ようしてくれただ。」

凄んで叫んだところで、沢野も慣れたものだ。いけしゃあしゃあと言いつつ、冷酒をくいつとあおって笑っている。沢野は、関西統括部門のためだけに動いているが、堀内は、少し私情が入っている。十五年も育てた子飼いの水都は、もはや身内の気分であるから、堀内も、いろいろと水都にだけは甘い。今回も、本社へ移動させるべ

きところを、関西へ統括部門を作ることにしたのは、動かない水都のためだからだ。

「すまん。悪かった。」と、という言葉が聞こえたが、怒鳴り返す気力がなくて無視した。日曜の午後から、同居人がもよおしたらしく、いきなり始めてしまったのは、別にかまわないのだが、何か興が乗ったらしく何時間も耐久レースのようなことをやられてしまい、こっちの腰が壊れた。そろそろ若くもないので回復が遅い。

朝になっても、動くのが難しいというのは、どうなんだ？ という状態だ。専業主夫だから、取り立てて急ぐことはないが、これだと、トイレに行くのも辛いもんがある。

朝から、トイレまで運んでもらい、ついでに、食事もさせてもらったから、当座は寝ているしかない状態だ。

……あれか、沢野のおっさんか？ 原因は……

怒りの琴線に触れたとしたら、沢野のおっさんの来訪だろう。元の職場からの復帰要請が気に食わなかったのか、はたまた、余所の男が、ここに来たことが気に食わへんのか、どちらかは判らないが、まあ、そんなところだ。

……沢野のおっさんで、あれやったら、堀内のおっさんが来たら……俺、やり殺されるんやないやろか……

そんなことを、つらつらと考えては、眠り、また、考えてと、自

墮落なことを繰り返していたら、呼び鈴の音がした。それから、枕元に置かれていた携帯が震える。相手は、堀内だったのが、笑える。噂なんてするもんじゃない。

「おい、みっちゃん、家におるんやろ？」

開口一番が、これだ。名乗りもしなければ、挨拶も、もしもしもない。いきなり、叫んでいるあたりが、堀内のおっさんらしいところだ。

「おることはおるけど、何の用や？」

だから、俺のほうも、そのまんま切り返す。

「肉とじうどん作ってくれ。肉は持ってきた。」

「はあ？」

「沢野に、卵とじうどんしたったんやろ？ そしたら、わしは、その上を作ってもらわんとあかん。」

「何があかんって？ ていうか、なんで、あんたらに、うどんなんかしたらなあかんねんっつ。」

「おまえの手料理なんて貴重すぎるからやっつ。とつとつ、ここを開けさらさんと、騒ぎ立てるぞ。」

このおっさんは、やる。いくら、人の少ないだろうウィークデーといえど、騒げば近所に迷惑になる。

「ちよつと待つとけ。」と、叫んで携帯は切ったものの、すぐに走れるわけではない。朝よりはマシだが、ガクガクの腰で歩くというのは、かなりしんどいものだ。えっちらほっちらと玄関まで辿り着き、鍵を開けて座りこんだと同時に、傍若無人な堀内が入ってきた。座りこんだ俺を見て、びっくりしたように、その前にしゃがみこむ。

「具合悪いんか？ みっちゃん？」

「……悪いやろ……どう見ても……俺……メシなんか、よう作らへんで……」

とりあえず、追い返すつもりで、余計に具合悪そうに装ったら、

「病院は？ 救急車か？」と、騒がれる。なぜ、俺の知り合いは、誰も彼も、こつ五月蠅いんだろうと、息を吐いた。

「寝てたら治るから帰ってくれ。話は後日でええ。」

「食欲は？」

「あんまない。」

「あほは？」

「仕事に決まってるやる。月曜日やぞ。」

「わかった、と、堀内は立ち上がって、玄関から出て行った。よしよし、と、俺は、そのまんま廊下に横になった。座っている格好がすでに辛かったりするのだ。しばらく休んだら、匍匐前進で戻ろうと思っていたら、また、扉が開いた。

「おいつつ、みっちゃんつつ。こんなところで寝るなつつ。どこや？ 寝室はどこなんやつつ？」

「……あーもー腹に力が入ったら、シバキたおしたんねけどなーくそー……」

殴る体力だけ回復してくれへんかなーと、俺は文句を吐きつつ、おっさんの肩を借りて寝室に戻った。そして、おっさんのとんでもない言葉に、余計に疲れた気がした。

「食欲なくても食べなあかんから、沢野にあっさりしたもん運ばせたからな。食べるんやで？」

「……え？……」

「肉は冷蔵庫に入れとくから、明日また来るわ。いや、晩メシにすきやきしてもらおうか、あのおほにな。」

「……うわあーやめてくれー……俺、花月にやり殺される……」

携帯で、「糸こんと春菊と白菜、それから、ごぼうやる？ あと、

すきやき麩と、うどんや。ああ？　×はうどんに決まつとるやるー  
がっつ。何？　卵とじ？　どあほっつ、それは朝じゃ朝っつ。」  
と、沢野とすきやきについて討論している堀内のおっさんを眺めつ  
つ、「なんでもええから、こいつを夕方までに帰らせくれ。」と、  
八百万の神様をお願いしてみたが、効くわけはないだろう。

……太陽が黄色い……土曜にやりやよかつた……

月曜日の朝、俺は激しく後悔したものの、仕事には出勤した。さ  
すがに、太陽が黄色いという理由で、仕事を休むわけにはいかなか  
ったからだ。

迷っているということは、戻っても良いと考えている。当人は気  
づいてないのだが、やっぱり古巣は楽なんだろう。

それを考えたら、なんかムカついた。人生投げかけている俺の嫁  
は、それで自分の身体に無理があっても、わからないというのが、  
ミソだ。何かあっても、当人は気づかないままで、ぶっ倒れている  
ことだろう。それを気にしてくれる職場なら、俺は構わないのだが、  
今のところは、それこそ、倒れたまんま放置されていそうで、イヤ  
だ。それを口で説明しても、俺の嫁にはわからない。それが腹立た  
しくなつて、ものすごくえげつない方法でストレスを解消した。久  
しぶりに、無茶をしたという自覚はある。ついでに、久しぶりに俺  
の嫁を介護老人にしてしまった。

起き上がる以前の状態だったから、下手すると熱も出しているか  
もしれない。今日は、うどんかおじやくらしいしか食えないだろうな  
と、それについても反省した。いくら専業主夫とはいえ、寝たきり  
にさせたのは申し訳ない。

……堀内のおっさんが、迎えに来るんなら、その時に、はっきり確認させてもらうしかないよな……

長年付き合いのある堀内には、俺も言いたいことが言えるし、俺の嫁のことも、よく知っているから、状況を説明しやすいだろう。

うだうだとしつつ、どうにか通常勤務をこなして、帰宅した。うどんは、家に冷凍があるので、それで済ますつもりだ。

「ただいまあー」

出て来るわけがないので、ぼそつと呟いて玄関開けたら、いきなり絶句した。賑やかな声とテレビの音が聞こえていた。玄関を締めた音に反応して、足音が近づいてきた。

「おお、遅かったやないか。」

「なっなんで？」

「おお、バクダン小僧も、立派になつとるやないか。」

「あんた、誰や？」

ふたりのおっさんが居間からやってきて、俺の前に立った。片方はいい。知り合いだし、話をしようと思っていた相手だ。だが、もう一方のずんぐりむっくりしたおっさんは、俺の記憶にはない。

「わし？ わし、沢野のおっちゃん。みっちゃんの上司や。和菓子は食ったか？ バクダン小僧。」

「あー！ 先週末たおっさんかあーっつ。」

「そうそう、みっちゃんが具合が悪いつていうから見舞いにこさせてもらった。あかんで、熱もあるやないか。」

なんで、玄関先で俺は、見ず知らずのおっさんから小言を言われなあかんねんと思ひ、そのまんま無視するように、居間へ向かった。

そこには、ぐったりしている俺の嫁がこたつに転がっていた。

「すまん、あいつら、帰りやらへんねん。」

見たこともない厚手の毛布に包まれて、片手で拝む様にして俺の嫁は、軽く頭を下げた。ついでに、こたつの上には、うちにあるはずのない卓上コンロと鉄鍋がある。

「熱あんねんて？」

「たいしたことない。それより、あれ、メシ食って帰るって言うて居座ってるんや。」

「はあ？　なんで？」

そして、嫁の説明を聞いて、脱力した。俺の嫁の作るメシ食いたさに、騒ぎになっているというのが、ほんと、おかしい。

「ごめんな、花月。」

本当に申し訳なさそうな顔をしている俺の嫁を見たら、やっぱり何も言えない。こいつのことだから、帰そうとはしただろう。具合が悪いのに、そんなこととしていたとしたら、そりゃ熱も出るというものだ。

「まあ、材料があるんやったら作つたるわ。」

「すまん。」

「おまえは食えるんか？」

「ちよつとぐらいなら。」

「わかった。お粥さんしたるから。」

すき焼きなら野菜も入っているし、卵で食べるから栄養はあるだろう。タダの材料なら容赦なく使ってやるうと立ち上がったら、居間の入り口にふたりのおっさんがニヤニヤしながら立っていた。

「何をさらしよるんじゃ、このポケっつ。」

「じゃかましいつつ。うちの家では、どんな酒も料理に使うんじやつつ。」

こたつの上にあるすきやき鍋の前で、花月と堀内のおっさんが喧嘩しながらも、すき焼きを作成している。うちの家は、日本酒なんでものは飲まないの、どんなものでも料理酒となるのだが、堀内が持ってきたのは、おそらく値段の張るやつだから怒るのは無理もない。

で、まあ、取り成してくれればいいのに、沢野のおっさんは楽しそうに、それを肴にしつつ、勝手に湯割りの焼酎を飲んでいたりする。

……もう、ほんま、あんたら、自由すぎるやろ……

俺が、これぐらい弱っているということは、俺の旦那も、同様に弱っているわけで、今日は、さっさと寝るつもりで帰って来ただろうから、接待なんてさせて、ほんま申し訳ないと思う。とはいえ、俺は長いことは立ってられへん状況なので手伝うことができない。

沢野のおっさんがやってきたのは、小一時間ほどしてからだった。転職して五年以上経っているとはいえ、昔から、こつちで、ぶいぶい言わせてたおっさんやから、知り合いのところで、料理を用意させたらしい。紙袋からタッパーを引っ張り出して、「レンジで温めてや。」と、堀内のおっさんに差し出している。

「みっちゃん、ぶぐぞうすいやつたら食べられるやろ？」

「また、そんな高そうなもんを……それ、温めんとくれ。」

徹底的な猫舌の俺は、湯気の出るものは苦手だ。まだ、冷めてい

るほうがマシというものだ。それを知っている堀内も、そのまんま、そのタッパーを渡してくれた。

「堀内、わしらのもあるで。」

当たり前やるうと言いつつ、堀内のおっさんも弁当を渡されて、それを開いた。「ご丁寧にお茶まであるのが、さすがというところだ。

「この間は、元気そうやったけどなあ。風邪か？」

「まあ、そんなとこやる。」

「しかし、おまえも律儀なあ。言つて、すぐに来てるとは思わへんかった。」

だが、この様子では料理なんてできないだろうと、沢野のおっさんも、よしゃいいのに、余計なことを言う。

「せやから、あのあほにすぎ焼きしてもらおうと思たわけや。材料は買おて、来てくれたんやるな？」

「もちろんや。酒も用意したし、わしも参加させてもらうで。」

「……いや、あんたら、大概にせいよ……」

俺は、沢野のおっさんの言葉に喉を詰まらせた。堀内だけでも、性質が悪いのに、さらに、沢野までおられたら、俺、監禁されるに違いない。

「ぐぶつげぼつ……おい、おっさんら……」

「まあ、しゃーないか。材料そつち持ちやしなあ。」

「おい、堀内のおっさんつっ、勝手に決めんなつっ。」

「ありや？ みつちゃん、顔赤いで熱あんの違うか？」

咽ている俺を見て、沢野のおっさんは、すちやりと携帯を取り出して、「風邪薬と毛布とテンピュール枕持ってこい。」とか叫んでいる。ついでとばかりに、堀内が、「それから、ビールダーズ追加じゃつっ。」と、沢野の携帯に叫んでいる。

人の話をきかないおっさんたちは、ほんま性質が悪い。メシを食い終わる頃に、風邪薬と毛布となんちゃら枕とビールダーズが届

いた。

「とりあえず、熱やったら、これで治まる。．．．おい、堀内、宴会は何時からや？」

「せやなあ、七時かそこいらやろう。」

「ほな、わし、用事片してから、もっかい来るわ。．．．みつちやん、アイスクリンでも買おうてきたるからな。大人しいときや。」

「もう、来んでええ。」

「つれないこといいなや。久しぶりにバクダン小僧の顔も見たいがな。」

あはははは、と、笑い、沢野は出て行った。堀内が出て行ったら、鍵をかけておこうと思っていた。食べ終わったものを片付けて、堀内が部屋を出たので、また、えっちらおっちらと部屋の外へ顔を出したら、こたつに寝転がっている堀内がいた。

．．．え？．．．

「仕事は？ おっさん。」

「なんや、みつちゃん、寂しなつたんか？」

「ちやうがな。おっさんかて仕事あるやろ？」

「わしの仕事は、待機。今、絶好調で、ツボやからな。くくくくくく．．．あれは売るで。」

堀内の言葉は、わかりにくいように喋っているが、長年付き合えば、それが意味しているものはわかる。たぶん、店長たちは、店の金に手を出した。というか、出すように唆されたに違いない。売るといのは、穴を開けた金の代わりに、闇金から本人名義で借金をさせて返済させることを指している。返済方法は、様々だ。マグロ漁船に乗せられるという比較的温厚なものから、臓器売買、戸籍売買、借金の額によって、それらは変わってくる。売るといのは、本人を売るとい意味なのだ。

「俺には関係ない。」

「せやな、おまえには関係ないわ。始末がつくまでは、好きにしたらええ。来月の中ごろには、どうにかする。」

売られる人間が可哀想だと、俺は思わない。売られる理由があるからだ。善良な人間だろうが悪人だろうが、ひっかかるほうが悪い。それだけの金を使ったのは、紛れもなく当人だ。それを返済するのは当然のことで、使った額に見合う売られ方をするのだから、それで妥当な罪だと言える。

「俺は仕事辞めた。」

「おまえ、ただいま、無断欠勤扱いにされてて、罪全部ひつかぶらされるみたいやど？」

「そうか。ほんなら、俺を売るか？」

「ははははは・・・ほんま、おまえはおもろいわ。おまえをソープに沈めたら、花月のあほが、今度こそ、ほんまに、わしを殺してくるやないか。おつとろしいことを言うな。」

わかつている。堀内は、そんなことはしない。ただし、俺が強情を張れば、俺もひっかけて始末するという脅しも含んでいる。

「俺、花月のためにできることしただけなんや。」

「したつたらええがな・・・廊下に転がるなよ、みつちゃん。ずるずると引きずられて、こたつに放り込まれ、枕と毛布も置いてくれた。午後の娯楽テレビの音を聞きながら、俺は、そのまんま薬のせいで眠ってしまった。」

それなりに優秀な小僧だ、と、堀内は知っている。高学歴とかいうことではない。頭が良いのだ。要領がいいとも言う。だいたいの仕組みを教えれば、それで、適当に仕事ができるのが、その証拠だ。ついでに、縁故がないのも、堀内には有難いことだ。何かあっても、

水都の始末さえつければ、表に漏れることはないからだ。そう思っ  
て、仕事を叩きこんで、この業界での暮らし方も教えたつもりだ。  
他人と深く関わってはいけけないのが、大前提の、この業界の水は、  
水都には合っていた。

・・・それが、よりにもよって、男と所帯を持つとはなあー。お  
っちゃんでも、想定外やったわ、みっちゃん・・・

それが、何がどうなったのか、強力な縁故ができた。それも、旦那だ。簡単に消すには、このふたりを同時に隠すしかないのだが、運の悪いことに、この旦那には両親がいて、職場があつて、社会と  
きっちり繋がつているので、おいそれと始末できない。男同士の  
不毛な関係だから、そのうち別れるだろうと、高を括っていたら、  
どっこい十年しても、いまだに幸せそうに暮らしていたりする。な  
んせ、他人にも自分にも関心のないはずの小僧が、『旦那のために  
できることをしたい』と、まで言うのだ。もう、堀内は呆れるを  
通り越して笑うしかない。

「それはそれで、わしはええねんけどな。」  
つまり、今度は、それが、小僧の足枷にはなるからだ。脅すこと  
だって、以前より簡単だし、懐柔するのも楽だ。それまでは、何に  
も興味がない小僧だったから、弱みがなかったからだ。仕事の上で  
は必要な小僧だ。簡単に手放すつもりなどない。

ぶるぶると携帯が震えた。

「わしや。・・・ああ・・・そうか、ひっかかったか。・・・  
わかった。それでは足りんやろ？ おまえらの取り分は一割や。五  
万でええんか？・・・ああ、そうやな。それぐらいはな。

人間など簡単なものだ。甘い声や一夜の楽しみで勘違いする。ほとんどん箍が外れて身分不相応のことをやりはじめれば、目の前の現金に目が眩む。それは自分の物ではないということを忘れられるのだ。

「……ホストか……えげつないの……」

定時連絡を切ったら、下から声がした。小僧が起きたらしい。

「えげつないことあるかい。分相応のことをしてたら、別に何も起きひん。……具合はどうや？」

「こんなもんやる。……俺、定時でなくてもええけど、今より早よ帰れるようにしてほしい。」

小僧は、人間に興味はない。だから、誰がどうなるうと動じない。今まで散々に、自分の側で墮ちて行く人間を冷ややかに見ていた。だから、感想を漏らしただけで、すぐに、自分の今後に話を切り替える。

「おまえがトップで関西統括を組むことにした。場所も、今このから動かすが、それほど遠くはない。関西の支店を統合して、その関係者は全員、そこへ送るから、おまえの仕事は半分になって、責任が倍になる。それでどうや？」

しばらく、小僧は考えていたが、「まあ、そんなこっちゃろうな。

」と、薄く笑った。それから、よろよろと立ち上がる。

「なんや？」

「トイレ。話は終わったから帰れ。」

壁伝いによるよると歩いている姿に、ふと気づいた。

「なあ、みっちゃん。」

「なんや？」

「おまえ、もしかして、腰あかんのか？」

堀内の言葉に、へっと鼻先で小僧は笑った。「残業ばっかして、一ヶ月溜めさせたら、こういいうことになるんや。」と、言い残してトイレへ消えた。

・・・あ、そういうことかいな・・・こら、まだまだ、別れることはあらへんな・・・

小僧の言葉に、堀内も苦笑して、冷蔵庫に入れたビールを手にして、ごろりと寝転がる。トイレから出てきた小僧は、堀内の姿に舌打ちして、自分の部屋へ戻った。

夕刻、沢野が乱入して来るまで、ふたりとも十分に情眠を貪ったのは言うまでもない。

すき焼きというのは、各家庭によって違うらしいということとは、俺も知っていた。うちの家ののは、平均的なものだったらしい。俺の嫁は、元々、家で食べたことが、ほとんどなくて現物を食べたのが、俺の手作りだから、それしか知らない。

「ごぼう？　なんで？」

「ええ出汁がでる。」

「すき焼き麩？　何じゃ、こらあー。」

「すき焼き専用の焼き麩や。味が染みたらうまいんや。」

準備されていた食材を広げて、びっくりするものが、いくつあった。外食しかしていないであろう堀内だが、食い物には五月蠅いらしい。肉も、どーんっと二キロあったのには驚いた。

「あのな、おっさん。」

「おう、なんや？」

別に手伝っているわけではない。俺が下僕のごとく働いているのを肴に、ビールを飲んだくれている。

「うちの嫁に、肉とじうどんをしてもらうつもりやってんやんな？」

「せや、みっちゃんの手作りを食うつもりやったのに、おまえのになったわ。」

「ほんなら、二キロもいらんし、これ、どう見ても、すき焼き用の特上ちやうんけ？ うどんに入れるんは、切り落としてええんやけど知らんのか？」

「切り落とし？ なんじゃ、それは？ すじ肉のことか？」

そうか、高級なもんしか食ってないと、切り落としも知らんのかと、俺は納得した。恐ろしく原価の張る肉とじうどんができたであろう。うどんと肉が半々の量というやつだ。ついでに、卵も高級品だ。

「ええ肉の切れ端のことや。うどんに入れるんやったら、200グラムもあつたら釣りがくるわ。」

「あほか、わしかて二キロも肉はいらんわい。あれは、おまえ、みっちゃんへの貢物じゃつつ。」

「ああ、そうなんか。そら、おおきに。」

俺の嫁に貢いでも、あまり意味がない。それが高かろうが珍しかろうが、興味がないからだ。俺より俺の嫁との付き合いが長い割りに、堀内は、わかっていても貢いでくる。

「だいたいやな。十代の若造でもあるまいに、叩き壊すほどの無茶しよる旦那持ちのみっちゃんやぞ？ 栄養のあるもんを貢いだらんと、倒れるやろうが。」

「へ？」

けけけけ……と意地悪そうな顔で堀内は笑っている。具合が悪い原因に気づいたらしい。

「ええ年しとつて、まだお盛んで何よりやな？ クソガキ。」

「じゃかましいわっつ。人んちの夫夫生活に意見すんなや、外野っ。」

「外野？ えらい言われようや。わし、みっちゃんの親代わりやのに。」

「親代わりやったら、もうちょっと可愛がったれや。……あいつ、仕舞いにぶっ倒れる。」

居間のほうは、テレビの音があるから、こちらの声は低くすれば聞こえない。言いたいことを先に言うほうがいいだろうと、俺は切り出した。すると、堀内も声を低くして、「すまんかった。」と、片手をあげた。

「わしも、忙しくて見落としとった。……定時には無理やが、もうちょっと早よ帰れる算段は、今つけとるところや。みっちゃんにも、そう説明したから、夜逃げするような真似はせんでくれ。」

「見破つとったか。」

「当たり前や、おまえの最終手段は、それやないか。」

昔、騒ぎを起こした時も、俺は逃亡を企てた。あの時も、このおっさんは、それを引き止めた。俺は何も変わってないらしい。

「水都は、なんて言うた？」

「『そういう、こつちやろつな』って言うた。まあ、それで納得せんかったら、おまえを山車にして脅すけどな。」

「ははははは……俺、今、刃物持つてんねんけど？ おっさん。」

「どあほ。わしを刺したら三年は服役じゃ。三年も、みっちゃんを夜啼きさせるつもりか？ 小僧。」

「……なるほど……そうくるか。」

「あほなこと言うてんと、さっさと材料を切れ。」

たぶん、堀内が来た時点で、話は纏まったのだろう。古巢に引き戻されることについて、俺の嫁は承諾はしたらしい。なんだかんだ言うて、堀内のおっさんは、俺の嫁には甘いのだ。気分的には父親気分だと、以前から言う。

「あんたが引退したら、水都も専業主夫にするからな。」

「せやな、そうしたつたらええわ。みっちゃん、それまでに経営に参加してなかったらな。……おいおい、こぼうはササガキやつ。そんなザクザク切るんやないわ。」

後半から、また声が大きくなる。あまりひそひそしては、俺の嫁が不審に思うからだ。

「それやったら、ササガキを買ってこいやつ、おっさん。」

だから、俺も怒鳴り返しつつ、こぼうをササガキにやりかえる。

台所で、仲良く喧嘩している声がする。なんだかんだと言うが、ふたりとも気が合うらしい。どうやら、材料が切り終わったらしく花月が戻ってきた。

「どうや？」

「長くはあかん。」

「わかった。」

長く座っていられるか、という質問だ。いつも、俺が寝たきりになると、花月は、寝たまま食べさせてくれるのだが、さすがに、おっさん二人の前だし、こたつでは難しい。どうするのかと思っていたが、とりあえず、寝とけ、と、手を下に合図した。

「さあさあ、ようやく始められるか。……とりあえず、肉。」

堀内が、脂身を落としている。俺は、すき焼きなんて作られたものしか食わないから作り方が、今ひとつわからんのだが、花月が黙っているところを見たら、あれで正解なんだろう。

「関西風か。久しぶりやな。」

沢野は、ちびちびと焼酎を口に含みつつ呟いている。中部は関東とも関西とも料理が違うので、慣れるまで苦労したと聞いている。

「あーおまつ、それっ。」

「うちでは酒は料理酒や。」

一枚肉を焼いて、そこに砂糖、酒、醤油で味付けして、野菜を投

入して、その野菜から染み出す水分で、さらに、肉を焼くというのが、基本ルールだが、うちの家には酒というものがない。いつもは白湯か水だ。で、堀内のおっさんが、ええ酒を持って来たと言ったから、花月が、それを投入したのだ。さぞかしおいしいやろつと、俺は、そのどつきあい漫才を笑いながら見ていた。

おもろい漫才も、すき焼きが出来上がれば終わる。さあさあ、と、食べられる段階になると、堀内は冷酒をくいつとあおつて、それから箸を付けた。沢野も、ほくほくとした顔で口を動かしている。俺どうやって食うかなーと思つていたら、こたつの上に茶碗が置かれた。それから、かなり大きめの器に、たまごをつけた白菜とか糸こんにゃくとか肉とかが、ちまちまと置かれていく。冷やさないと食べられない俺の場合、鍋物は、こういう算段になる。それから、小皿に梅干と、お粥さんの入った茶碗と冷たいお茶が準備される。

「お待たせ、水都。」

「うえ？」

ゆつくりと起き上がらせられて、俺の背後に花月が胡坐で座りこんだ。それにもたれるようにして俺の身体は支えられて、箸を渡された。

「座椅子ないから、とりあえず、これで。」

「ああ、座椅子な。・・・こんなに食べへんで。」

「いや、肉は食つとけつ。おっさんからの貢物やねんから、めっちゃ高いぞ。」

「そうか、ほな、おまえが俺の代わりに食つとけや。俺、高いもん食つと消化不良起こすさかい。」

「食べるだけでええから。」

「わかつてる。・・・おまえ、お茶でも飲むか？」

「せなや。」

「すまんのー腹減ってんのに。すぐ終わらせるわ。」

「ゆつくりでええで。お粥さんも食べや。」

「はいはい、おまえ、マメすぎ。・・・口に入れたるか？」

「ええから、自分が食べ。」

たぶん、この二人、いつも、こんな会話を、ふたりつきりで行っているんだろうなと、沢野と堀内は啞然としている。親父たちの存在を忘れていたのか、いつも通りのことなので気にしていないのか、おまえら、どこの熱々新婚さんやねんっつ、ということをやらかしているのだが、当人たち、ごく普通だ。たぶん、これが素だ。

「なんか微妙に寂しい気分や。」

沢野が、はあ、と、息を吐き出して、ぐいっと焼酎を飲む。

「わし、かなりムカつくわ。」

対して、堀内は、けっつと吐き出して、冷酒を一気飲みした。

当人たちは、いちやいちゃしているつもりはないので、淡々としている。

「なあ、みつちゃん。」

「なんや？ 沢野のおっさん。」

「それ、欲しい。」

それは、水都の背後に座っている花月のことだ。ちまちまとお粥を食べていた水都を、のんびりと観察しつつ、ウーロン茶を飲んでいる旦那だ。水都と同じ職場に勤めるということなら、ふたりして本社へ移動させられるので、沢野は、そう言った。だが、だ。ふたりの言葉に、さらに絶句する目に遭わされた。

「あかん、これは、俺のもんや。手を出したらしばくぞっつ。」

「悪いけど、俺、水都以外の男はあかんから。」

いや、おまえら、もう、ほんと、その天然告白大会は何ごとなんよ？ と、堀内は、さらに度肝を抜かれた。いつもは単品で会うこ

とが多いから、ふたり揃ったら、こんなに強烈だとは知らなかったのだ。

## その1

水都が、メシを食い終わったので、また横にしてから、俺はその隣でメシにありつく。その段階で、おっさん二人は、すっかりと腹が満たされたのか、箸は動きを止めて、だらだらと飲みのほうへ流れているようだ。

「肉は、さすがに余りそうやな。」

俺が食べている加減を観察して、堀内のおっさんは残りの肉を覗きこむ。貢物というたが、「二、三日のうちに、肉とじしてや。」と、水都に頼んでいる。

「まだ言うか？」

「それが目的やねんから当たり前や。それより、一杯付き合えへんか？」

「いらん。・・・花月、あれとって。」

「ああ、すまん。」

水都の指さしているのは、タバコだ。満腹になると、一服したくなるのは、俺も一緒だ。灰皿とタバコとライターを渡したら、すぐに、ぷかぁーと紫煙が横からあがってくる。それを見てから、俺は、残りのすき焼きに手を出す。

「ほんま、おまえら、熟年夫婦のノリやな？」

呆れたように、沢野は呟いているが、顔は笑っている。メは、うどんやと叫んでいたが、そこまでは入らない。冷蔵庫に、残っている食材は、かなりあるので、我が家としては有難いことだ。

明日は、これに、うどんをいれて晩メシにするかと考える。どうせ、水都は、量は食べないから、残りで十分だ。

「花月、寝るわ。」

「おう。」

タバコを吸い終わると、緩々と立ち上がって寝室へ消えた。ここに、水都がいれば、おっさんたちも引き上げないだろうと思っ

ことだと、俺は気づいていたから、来客を置き去りにすることを注意しなかった。正直、俺も眠い。そろそろ引き上げてくれないだろうか、と、おっさん二人を見たが、気にする様子もなく飲んでい。「話をついたんやったら帰ってくれへんか？」

「せやな。おまえの面を見て飲んだら、悪夢を見そつや。」

「しかし、バクダン小僧も十年で一丁前になるもんや。」

「おっさん、それ、禁句やから。」

結局、くだらんと俺が食い終わるまで、おっさんたちは俺に付き合ってから帰って行った。片付けをして、水都の布団に潜り込む。人肌で温まった布団で、ほっと息を吐く。

「帰ったか？」

「うん。」

「すまん、あのおっさんだけは、何を言ってもあかんねん。」

「あはははは……まあ、ええんちがうか。気にしてるから、顔出ししたんやろ？」

「半分はそれ、半分は釘刺しや。」

「戻るんか？」

「ああ、戻らんとあかんらしいわ。」

「でも、前と一緒にやったら夜逃げするから。」

俺が、そう言うと、水都は大笑いして、「せやな。」と、頷いた。仕事のことは、俺にはわからないが、それなりの決着はつけたらしい。

「いつまでや？」

「来月の中旬まではリフレッシュ休暇やねんて。」

「ふーん……土日で旅行……行こうや。」

「その話は明日な。おやすみ、花月。」

やっぱり疲れていたらしく俺は、風呂にも入らず、そのまんま失神するように眠った。今度から、やるなら土曜日にしようと思省した。

一日、身体を、五月蠅いおっさんらがおったとはいえ、曲がりな  
りにも休められた俺は、どうにか、次の朝は動けるようにはなっ  
ていた。だが、まだ、なんだか、腰がぴきつとクるので、大人しく動  
いている。昨日は、早めに寝たので、朝は、いつもより早起きな  
った。

対して、太陽が黄色くなるほどの疲労で、一日仕事をして、帰宅  
してからも、五月蠅いおっさんに小突き回されていた俺の旦那は、  
起床時間になっても沈没していた。

・・・まあ、それで、清々しく起きてきたら、『化け物』と、俺  
は賞賛したるけどな・・・

卵をナタネにして、それを弁当の上に置く。昨日の肉を細かくし  
たのも、ちよつと醤油で味付けして炒めて、それも配置すると、二  
色のそぼろ弁当になった。

・・・えーつと、後は、端っこに梅干を埋めて・・・ほんで、お  
かずか・・・

昨日の残りの春菊をお湯に潜らせて、ポン酢で合えて絞る。それ  
から、煮豆と、おかずも、とりあえず入れて弁当らしくなった。弁  
当なんて作ったことがないから、勝手がわからなくて時間がかかっ  
た。気づいたら、そろそろ花月の出勤時間だ。

ゆつくりと沈没している花月の側まで行って、耳元で怒鳴った。  
これが一番効果的な起こし方である。

「花月っつ、そろそろ起きや。シャワー浴びてメシ食わなあかんか  
ら、ギリギリやで。」

ああ、もう、大声出すのにも腰は使われるということ、こういう時に実感する。叫ぶと、ぴきつとクるのだ、俺の腰。

うごうごととして、はっと時計の数字に気づいた花月が飛び上がる。すぐさま風呂場へ走って行った。低血圧の俺なら、確実に、あの段階で立ち眩みで倒れているはずだが、健康な旦那は、そのまんま行動している。ああいうところは、羨ましいところだ。

シャワーを浴びている間に、食パンを焼いて、カップスープを作った。さすがに、サラダまでは無理で、風呂場から、また走ってきた花月は、食パンを齧りながら、頭を拭いている。

「うーうー」

「ああ？ ああ、後で食うから。ほら、後十分やで？」

ひげをそりつつ、パンを食うというのは、どういう所業だろう、と、俺は、それをノンビリと観察していた。それで、さらに、俺に、「朝メシを食え」とか注意までしているのだ。ある意味、聖徳太子並にすごいかもしれない。ごくごくとスープで、パンを飲み込むと、自室へ着替えに行った。パンイチで走り回っていて寒いと感じる間もなかった様子だ。

「ごめん、昼飯。」

スーツを着た花月が玄関へ行く前に、そう言って謝った。弁当ができなかったことを謝っている。

「ええねん、たまに、マクドでも食うてくるから。」

そして、弁当箱を差し出したら、ものすごい顔をされてしまった。それは驚いているのか怯えているのか、どっちなんや？ という形相だった。

「おま、これ。」

「俺のお初やからな。期待はせんほうがええで。」

「水都、愛してるでー」

「朝からボケかましてんと、さつさと仕事に行けつつ。」

いつもなら、ここで蹴りを見舞うのだが、足があがらない。いや、あがるだろうが、ぴきでは済まなくなるので、やめた。

やめたら、花月に朝からチュウされてしまったが、まあ、たまにはいいやろ。旦那のやる気を出させるのも嫁の仕事っちゃー仕事やし。

「やれやれ、今日は、ごはん食んでもええわ。あーっ気分的に楽やなあ。」

毎日毎日、作られていた弁当は、主に俺のために作成されていたで、まあ、逆転の発想をすると、俺が作れば、俺の分は作らなくて良くて、さらに、花月が喜ぶということになる。

「毎日は無理やけど、家における間は、なるべく作ってみようかな。」  
一石二鳥なので、この案は採用だ。洗濯機のボタンを、ぽちっと押して、俺は、やでやでとこたつで解けた。

弁当の蓋を開けるのが、こんなに楽しみだったことが、過去あったらうか、いや、ないって、小学校の遠足以上にときめいてるしっつ、と、昼休みまで、ニタニタと顔を緩ませて過ごした。

そして、重大なことに気づいたのは、弁当の蓋を開けた、その瞬間だ。

「ああっ、そうか・・・あのあほーっつ。」  
思わず叫んで、食堂で隣りに座っていた御堂筋に後ろ頭をはたかれた。

「大声出すなやつつ、吉本。・・・あのな、愛妻弁当が嬉しいんはわかるけど、わかるけど騒ぐな。」

「いや、そーやなくて・・・しもたわ、下手こいてもた。あいつ、絶対に朝昼抜きで、ごろごろしとるわ。」

「はあ？」

俺の分だけを製作したのだから、あいつの分はない。マクドでも食うとは言ったけど、わざわざ出歩くとも思えない。うっかりしていたが、あいつ、腰をいわしている。

「あーもー、今日、早速帰って説教せな。」

「ええ？ 待て待て、吉本。弁当作ってくれた相手に説教で、どうなんよ？」

で、まあ、蓋を開けた弁当が二色そばろという、可愛いものだったので、とりあえず、無言で食い始める。それを見て、御堂筋も、やれやれと本日のランチに手を出した。

……うまいやんけ……

そばろ部分は、ちゃんと濃い味付けになっていて、白メシのおかずになっていた。後はあっさりとした春菊とか煮マメが配置されていてバランスも取れている。

……しかし、あいつ、容赦のない……

このひき肉状になっている肉は、昨日の肉だ。特上のすき焼き肉を、ひき肉にするセンスは、俺の嫁にしかないだろう。

「なあ、御堂筋、今頃、一泊やったら、どこへ行く？」

食い終わってから、俺は、昨日の話を思い出した。今月中旬までというなら、今週と来週くらいは、まだ大丈夫のはずだ。

帰りに、旅行パンフを、あっちこっちから取って来た。それを、

かばんから取り出したら、俺の嫁は目を丸くした。

「舞台は、普段じゃないほうがええなあ、と、思っで。」

「ああ？ 旅行で舞台って何？」

昨日の残りに、肉と野菜を足してうどんも足した。それを、台所で、俺の嫁が煮ている。どうにか動けるようにはなったらしいが、まだ、なんかぎこちない動きで振り向く。

「弁当食わへんだら、一人えっち公開。」

「ああ？ ないもんは食えへん。」

「どあほ、その煮てるやつとうどんで昼飯になったやろ？ なんで、晩メシになつとんねん？」

「マクド食ったから。」

「ふーん、領収書は？」

「え？」

「マクドの領収書もしくは、本日、外出した証拠は？」

「ない。でも、出た。」

「どこのマクドや？ 駅前か？」

「うん。」

「……あのな、水都。そんな歩き方で行けると思っんか？ ひよこひよここと歩いて、メシ食いに行くなんてことは、おまえに關してはあらへんと断言できるわ。」

空腹だったら、砂糖入りのコーヒーを飲む。俺の嫁は、そういう人なんで、わざわざメシを食うために外出なんてしない。ましてや、腰の具合がおかしくて、ゆっくりしか歩けない状態なら寝ていようと思える。そういう人間だ。で、まあ、十年も夫もどきなんかやっっている、嘘つきやがっても、すぐに判る。うーと唸りつつ、俺の嫁は視線を逸らした。

「メシを食わへんかったら、ひとりえっち公開って言ったよな？」

それで、普通にしても、おもしろいから、どっかの旅館でやっていただこうと思ったわけよ？ 部屋に露天風呂ついているところにしや

へんか？」

「それは、あれか？ その露天風呂でやれってことか？」

「そうそう、なんか情緒あってええやん。たまに、そういう色っぽいこともしとかんと。どうせやったら、城崎で力二とかどうや？」

そろそろ、シーズン終わるし。」

「なんで、俺の旦那は、こんなあほやねんやろう。」

憐れむような目で俺を見て、俺の嫁は溜息を吐いた。旅行は確定だ。嫁が反対するわけがない。

「ほな、メシ食いながら行き先を決めようや。」

「俺、カニ尽くしかいややで。」

「わかつてるって、懐石風の料理に単品で力二追加とかにする。」  
うどんの入ったすき焼きを食べつつ、俺らは、週末の旅行について、いろいろとパンフを漁った。結論は出なかったが、俺の行きたいところでいいと、嫁が言うので、御堂筋に少し相談してみようと思った。できたら、ミステリーツアーで、嫁には行き先を知らせない方向でいきたい。

それほど、俺の手料理というものは貴重だっただろうか。ふと考えて、そっぴや俺の旦那と同居するまで、料理といえば、「カップラーメンに湯を入れる」だったことを思い出した。同居して、俺の旦那が作るものを観察して、自分でもできそうなことをやりだしたら、俺の旦那は泣きださんばかりに喜んだから、それからちまちまと料理を覚えたのだ。

つまり、堀内のおっさんとつるんでいた頃は、俺の内に手料理というカテゴリーは存在しておらず、さらに、花月と同居してからは、堀内が転職してしまったこともあって、つるむことがなくなっていた。

「なるほど。」

「何が、『なるほど』や？ みつちゃん。」

あなたは、この家の人間か？ と、ツッコミたくなるほど、堂に入った態度で堀内は、こたつで寛いでいる。持ってきた書類に目を通し、何件か電話した後、おっさんは新聞を眺めていたのだ。

「俺の手料理の貴重さが、わかった。」

「貴重やる？ わし、見たことあらへんだんやから。」

「せやな。同居してから、じわじわと覚えたわ。」

「花月のガキが、あんなに料理できんのも知らんかったしな。」

「花月は、会った時から自炊やったで。そのほうが食事代が安いからやって。」

学生時代、花月は学費と家賃については親に頼っていたが、後はほとんど、バイトで賄っていた。自炊のほうが栄養バランスがよくて安価であることを、俺に説明してくれたし、俺の分も作ってくれていた。

「ようできたヤツやで、あれは。」

しみじみと、堀内が呟く。

「うん、俺も、よう、あんな俺の旦那になりよったと思うわ。」

俺も、卵を攪拌させつつ呟いた。どこもかしこも、まともで真つ当な人間であるはずの花月が、男の俺を嫁に貰った。理由は、「なんぼやっても孕まないから。」と「少し壊れているから」だった。今でも、よくわからない理由だが、当人は、離婚するつもりはないらしく、今でも毎日、ここへ帰ってくる。

「いやまあ、割れ鍋に綴じ蓋うちゅーか、なんちゅーかやなあ。」

「そういうもんやろうか？ あいつ、元々はホモやないはずやけどなあ。・・・そこ、片してくれるか？ おっさん。うどんだけで。」

「

「おう、すまんすまん。おまえ、運べるんか？」

まだ、腰に違和感はあるのだが、まあ、うどんぐらいは運べる。

いつものように花月によって作成されていた弁当と、朝メシを運び、

やれやれと俺もこたつに落ち着く。

きつちりと気付きやがった俺の旦那は、朝から、ちまちまと俺の弁当を作成した。で、俺のほうは、旦那の弁当を作成した。ということ、内容は同じだが、どのような配分であるかは、お互いに内緒で作った。

堀内のおっさんが、肉とじうどんを作れと、昼前に押しかけてきたので、その弁当は結局、おっさんの前にあつたりする。パカんと蓋を開けて、おっさんが、へなへなと萎れた。

「ん？」

その様子に、俺も弁当を見て、ものすごく気分が萎えた。ピンクのでんぶで、ハートが描かれていたのだ。

「……ほんまにあほやな、あいつ……」

わざわざ、でんぶまで買って作つたのだから、その努力には頭が下がるのだが、それが三十を越えた俺の弁当ということに、疑問はないのだろうか、と、思う。

「……みつちゃん……」

「なんや？」

「これしかないんか？」

堀内は情けないという顔で、弁当を俺に向ける。

「あらへんで。後は、このパンやから。うどんとパンはあかんやろう。」

「……あいつ……ほんまに、あほやな？」

「あほやなかったら、俺なんか嫁に貰わへんと思うで。」

せやな、と、言いつつ、おっさんは、無言で弁当に箸をつけた。

ピンクのハートが飾られた弁当なんてもんは、テレビドラマの世界だけだと思っていたので、実物が現れた時は絶句した。それも作ったのが、女子高生とか若いOLとかいうなら、わしも驚かなかつたかもしれない。

作ったのは、三十を越えたクソガキで、食べさせる相手も三十を越えたボケガキというのが、非常に不愉快な事実だ。十年も生活して、まだ、そんな甘ったるいことをするのか、あのクソガキの頭を分析してもらいたいと思う。それも愛想の欠片も何もないボケガキが、それで喜んでる節はない。目の前で、もそもそと食パンを食っている水都は、半分義務で食べているような生き物だ。愛情をかけた弁当というもの自体を認識しているかどうかが怪しい。

「これ、毎日、作ってもらっとんのか？ みつちゃん。」

「おう、そうやで。俺は、そんなに食われへんって言うんやけど、やめるつもりはないらしい。」

へんつつと鼻息で面倒だと現して、ベーコンを噛んでいるところを見ると、やはり弁当を作って貰えることについての感慨なんてものは感じられない。だが、文句を吐きつつも食事しているわけだから、十年で、そういう躰けはされたということだろう。

「来週の木曜日の予定はあるか？」

「いいや。」

「ほな、空けといてくれ。朝のうちに迎えに来るから、スーツで待機しといてや。」

「わかった。」

クビは認められないと言ったので、大人しく頷いた。いや、納得がいかないとなれば、逃げるだろうが、それをさせるつもりはない。

「お昼おごつたるからな。」

「ああ、せやせや。これ、沢野のおっさんに叩き返しといてくれ。」

唐突に思い出したのか、自分の背後のチェストから、クリップで留められた札を、水都が差し出した。

「なんや、この金？」

「沢野のおっさんが、「スープに行け」、言うてくれた。あのおっさんから金なんか貰うと碌なことあらへん。」

「それは賢明な判断や。」

それを受け取って胸ポケットにしまったら、追い討ちをかけるように、メモ用紙とサインペンを渡された。さすがに、わしの教育は息づいているな、と、苦笑して、そこに、「金五万円受領」と、書いてサインした後に、つき返し、うどんをすする。インスタントの出汁で作られているが、ちゃんと味付けされていて、肉とじうどんは美味い。

「みつちゃんの作ったうどんが食べられるなんてなあ。」

「いや、それぐらいは作れるから。」

「他は、何ができんねん？」

「簡単な煮物とかぐらいはできるけどなあ。花月のほうが上手や。」  
「年季が違うからなあ」と、水都は楽しそうに笑いつつ、野菜スープを飲んでいいる。それらは、全てバクダン小僧が作ったものだ。

「花月のあほは、おまえの作ったもののほうが美味いかぬかしとるんちゃうか？」

「そうやねん、あいつ、味覚おかしいで。」

「いや、おまえらが幸せやったら、ええねんけど、目一杯に惚気るのは勘弁してくれ、と、堀内は内心でツッコむ。」

## そのろく

「天使の寝顔で寝る。」 という言葉で、いつもなら、とんでもないことになる金曜日の夜は、別々に寝た。ようやく俺の嫁の腰の具合が治ったので、やれやれと、俺は大人しく寝た。せっかくの旅行なんだから、万全の体調であるほうがいい。

翌朝、ぼーっとしている俺の嫁を、とりあえず、着替えさせて駅前へ出向いた。電車なら、いつでもどこでも飲酒できるのだが、生憎と、俺も俺の嫁も、飲酒に、さほど興味がない。ついでに、明日の俺の嫁の体調を考えたら、レンタカーを借りるほうが得策だった。

「まくどでええか？」

「メシはいらん。」

「あかんで、サービスエリアあんまりないところやねんからっつ。」  
レンタカーを借りる前に、駅前のマクドで朝マクドした。それから、車を借りて、俺が運転する。だいたい、行きしなは、嫁で、帰りは俺というのが、基本だ。だが、今回に限っては、俺が運転する。行き先を教えないミステリーツアーだからだ。

「ほんで？」

「まあ寝とき寝とき。」

「……ラブホか？……」

「いいや、ちゃんとネットで予約した。露天風呂付き部屋で、海の幸豪華料理。」

「中国か山陽か、それとも播但か？」

「山陽から地道。」

「あれ？ カニはええんかい？」

「いや、満杯やったんよ、カニは。」

「三朝？」

「うーん、ええとこ突くなあ。」

「ふーん。」

それで、おおよその予測はついたのか、俺の嫁は、シートを少し倒してサングラスをかけた。今夜は、どうせ寝かすつもりもないので、体力温存してもらおうほうがいい。

さほど遠い場所でもないの、あっちこっち寄り道しつつ、とりあえず海まで出るつもりだった。せつかくの遠出なので、ちょっと個人的趣味も満足させてもらおうつもりだ。

名神からバイパスを乗り継いで、山陽道へ入った。そこから、瀬戸内自動車道へと道を進めたら、嫁は、「ああ、うどんか。」と、呟いた。けれど、瀬戸大橋手前で、そこを降りて、鷺羽山へと足を向けた。

途中で、たこのうまい店で昼飯を食って、鷺羽山の展望台へと登る。土曜日の割に観光客はいなかった。眼下に広がるのは、瀬戸内海の島と海で、向こう側の四国まで、綺麗に見渡せた。

「ええ景色やなあ。」

ベンチに座った俺の嫁は、まぶしそうに目を細めて、景色を堪能している。本当に久しぶりに遠出だ。

「ほんま、ええ景色や。・・・なあ、水都。」

「ん？」

「結婚十周年やねんけど？ スウィートテンダイヤはいらんか？」

「はあ？」

まあ、きつちりと、いつ結婚したということはないので、就職して同居した年が結婚した年だと俺は決めている。十年を越えた。そのお祝いも兼ねて、旅行することにしたのだが、俺の嫁は気付いていなかった。

「なんて言っんやろうな？ 銀婚式が二十五年やろ？ 金婚式は五十年。」

「さあ、知らんな、それは。・・・そうか、十年も経ったんやな

あ。おまえも飽きへんやつちゃで。」

呆れたように微笑んで、俺の嫁は、俺の顔を覗きこむ。十年以上一緒に居ると、すでに、この顔があるのが当たり前になっている。飽きも呆れもしないのだから、これでよかつたんだろう。

「おまえこそ、よう、こんなしつこい男と一緒にいるわ。」

「あーそっぴやそっぴや。お互い様やな。」

あはははと二人して笑い飛ばした。小春日和の温かい日で、俺と俺の嫁は、そこで、のんびりと日向ぼっこを堪能した。

小一時間ほど、ぼかぼかとした小春日和の展望台で過ごし、そこから引き返した。せっかく、ここまで来たのだから、俺としては是非とも観たいものがある。

「大原へ行く。」

「好きやなあ。『睡蓮』。」

「しゃーないやろう。あれ、日本人の心に、最も響く絵画やと言われてるんやぞ。」

「・・・俺、響かへんけど？」

「おまえ、日本人のカテゴリから逸脱してるからな。」

「うるさいのー、どうせ、俺は高尚な趣味はあらへん。それやったら、俺は、どこかで茶でもしばいてる。」

「あかん、おまえと見たいから連れて行く。」

けっつ、と、俺の嫁は、それから無言だ。拗ねているのなら可愛い、そうではない。面倒だと思っているだけのことだ。いつもは俺が、そういう場所に行くとき半日くらい動かなくなるからだ。だが、さすがに、宿までの移動を考えたら、それほどの時間は使えない。だから、ひとつだけ、どうしても見たいものだけを嫁と並んで見ることにしていた。

「睡蓮だけやから、そんなに時間はかからへん。」

「ん？ あっこは、他もあつたやろ？ えーつと、『ゲルニカ』や

「つたかな？」

「あるで、ゲルニカ。それから、印象派も多数。書道も焼き物もな。でも、今回は時間もないから『睡蓮』だけ。」

「明日にしたらええやんか。」

「ん？」

「どうせ、俺、明日は使い物にならんから、クルマで寝てるだけやし。その間に行け。」

「なんや、やる気やないか？ 俺の嫁。」

「言い出したんは、おまえじゃ。」

「明日は、宿で昼まで、まったりして帰るから時間はあらへん。」

「え？」

「時間延長して昼飯も食うて帰るように予約した。なんやったら、お姫様だつこでクルマまで運ぶで？」

「いや、それまでには歩けると思う。」

「またまたあーかなんなあー俺に一週間も我慢させてることを忘れてるで、俺の嫁。」

「いつ？・・・まさか、また、あれをやるんか？ おまえ・・・」

「そうそう、あれを。なんなら、違うこともいろいろと。」

「ストリップとかで手を打たへんか？ 花月。」

「えーーーーー浴衣脱ぐだけやる？ 色気も何もあらへんがな。」

「そんな与太話をしつつ、倉敷の美観地区へ入った。ここにある大原美術館が、『睡蓮』のある場所だ。近くの駐車場へ車をいれて、そこから歩いた。何年かぶりに訪れたので、店が変わっていたのは驚いた。」

「やっぱ、いろいろと変化はあるらしいな。」

「そら、建物は変えられへんとなつたら中身だけやもんな。」

「ぶらぶらと目的の美術館へ向う道すがら、たまには来るべきやなと思つた。米子の美術館には、数年に一度は行っているが、ここは、」

何年かぶりだった。油絵が多いので、俺の好みの絵画が少ないからだ。

『睡蓮』は、正確には、モネの『睡蓮』という油絵の一連の作品だ。それらが配置された部屋があり、これらは常設展示されている。日本人にも懐かしいと思わせる原風景のような絵画で、有名な作品だ。

「ほら、これが『睡蓮』」

「へえー連作なんやなあ。知らなかった。」

大きなキャンパスと、それに付随するような小さなキャンパスに、睡蓮が描かれている。遠目に見ると、まるで写真のような風景に見えるのが、この絵の売りだ。

以前は、水都は、外の茶店で本を読んで待っていた。だから、こいつは、ここに来たことがあるのに、実物を拝むのは初めてだ。

「きれいやる？」

「せやな。」

急ぐ旅ではないので、少し、その部屋で眺めていた。それから、

「むらすずめ」という土産菓子を買って、本日の宿へ向う。

「たまには油絵もええな。」

「それはよかった。また、ゆっくりと見に来よな。」

ここなら、クルマがあれば、それほど遠い場所ではない。今度は、これを目的にするような日程を組もう。

今回は、行き先も泊まりも、全てが内緒と、花月は宣言したので、助手席で、のんびりとしている。倉敷から高速で岡山まで戻り、中国道方面へ走り出したので、湯原か三朝だろうと思った。有名どころの温泉旅館なんて高いのに、どないして、あの短期間で泊まりを決められたのが、不思議だ。

この男、思い立ったら吉日という性格なので、わざわざ予約するということがない。行きたいところまで走り、そこで飛び込みで宿を確保するのが常だ。だから、行き先が、元から決まっている場合は、俺が当日の朝とかに、旅館をネット予約する。

つまり、そういう細かい作業は、俺の担当であるわけだから、こいつが、まめまめしくネット検索したとは思えない。大方、パンフから、適当に電話したと思われた。

・・・ネットやったら、割安になんねんけどな・・・

多少でも、ネット予約するほうが得なことが多い。それすら、気付いていないので、料金が気になる。

「なあ、花月。旅館、どーやって探した？」

「後で教えたるわ。俺も現物は知らんから。あー、これで、ナビ設定してくれへんか？」

差し出された紙を見て、え？ と、俺は唖った。聞いたこともない温泉名だったからだ。

「はよ入れてくれ。高速降りてまう。」

そう、湯郷や三朝ではなくて、岡山市内付近だったのだ。慌ててナビ設定をして、旅行会社にでも選んでもろたんやろうか、と、俺は疑問に思った。俺ですら知らんような温泉地を、こいつが知っているわけではない。

高速を降りて、三十分もいかないうちに、大きな旅館に到着した。市内に近い割りに静かなところだ。

通された部屋は、特別室らしく、かなり広いし、ベッドがふたつあり、それとは別に和室の居間がある。その奥には、花月が言い倒していた部屋付きの露天風呂まであった。大浴場も何箇所かあって、

食事まで、小一時間あるので、そちらへ入りに行くことにした。

「ほんで？」

大浴場の大きな岩のある湯船に沈んでから、俺が切り出したなら、すんなりと答えは返って来た。

「御堂筋の彼女が、旅行マニアなんやそうや。ほんで、探してもろたんよ。さすがに、三朝とかは高すぎて無理やったからな。」

「はあ？」

「御堂筋が携帯でメールして、十分くらいで返事くれたで。ここやったら、穴場やから静かだええやろってさ。」

「また、御堂筋さんのホモ好きの彼女からの情報なんか。」

「まあ、ええがな。当人は、ものすごく妄想の役に立ったって喜んでたで。」

「え、それ、ちょっと……。」

つまり、御堂筋さんの彼女は、俺らが、部屋付きの露天風呂でえっちすることか想像して楽しんでるということだ。

「ええやん。想像すんのはタダや。」

「俺、絶対に会いたないわ、御堂筋さんの彼女と。」

「ああ、それは心配ないで。御堂筋も、あかんって止めてくれてるらしいから。」

あはははは……と、気楽に、花月は笑っている。いや、まあ、タダやけど、想像されるのもイヤなもんがある。別に、彼女が想像するような色っぽいもんはない。日常的にやってることだし、お互い、今更、何がどうでも、いちやいちゃしたいとは思わないぐらいに、長いこと生活している。

「でも、貸し切り状態っていうのは、すごいな。」

「ほんまになあー百人くらい入れそうな風呂が貸し切りっていうのも、ええもんや。いっちょよ、泳いどころか？」

「あー背泳ぎとかはやめとけ。汚いもんが丸見えで、俺の気分が悪うなる。」

「えらい言われ方やな。」

誰もいないのを、良いことに、ふたりして、大浴場でクロールだとか平泳ぎだとか、散々に暴れて遊んだ。

大浴場から、そのまんま食事処へ赴いた。唯一の問題点は、この食事が部屋ではないところだ。のんびりと部屋で、食事するほうが気楽でいいのだが、さすがに料金的に、そこまでの贅沢はできなかった。

「吉本様」と、書かれた食事処の個室には、すでに準備がされている。

「とりあえず、ビールでええか。」  
「せやな。」

ふたりとも飲むのは、さほど好きではないので、大瓶のビール一本もあれば十分だ。会席風の料理は、温かいものは後から運ばれてくる。とりあえず、予約したのは、カニとアワビの踊り食いコースなるもので、追加で、地元の牛の陶板焼きも頼んでおいた。

「これ、まだ、出てくるんか？」  
続々と運ばれてくる料理に、水都は呆れている。メインディッシュに行く前に、すでに腹がくちくちくなつたらしい。

「せやから全部食うたら、あかんって、俺が言つたやないか。」  
ほんまに、もう、と、俺は、水都の前の皿と、俺のを入れ替える。食の細い水都は、会席なんてものは完食できる代物ではない。だから、適当に箸を出す程度のことになる。カニの身をほじり、それを面前に差し出すと、「えー」と、うんざりした顔になる。

「あら、まだ、これからですよ。」  
アワビを運んできた仲居が、腹を押さえている水都に苦笑してい

る。陶板の上に載ったアワビは下からの炎で、ぐりぐりと動き出す。「うわぁーえげつなあー」

「これ、うまいねってっつ。」

「そうですよ、生きたままなんで新鮮ですからね。・・・ビール追加しましょうか？」

ようやく空になったビールに仲居は、追加を尋ねたが、酒は、それほど欲しくない。

「いや、ウーロン茶ふたつください。俺らふたりとも酒はあかんですわ。・・・こいつとでなかったら、ゆつくりメシも食べませんのや。」

「ああ、そうですね。だいたい、みなさん、飲まれますもんね。よかったですね、同じ酒量の方がいらっしやって。」

・・・ええ、そりゃ、もう、最高の俺の嫁ですから・・・

と、内心でツッコミつつ、「そうですね。」と、笑って誤魔化す。ゲイ夫夫なんてものだと、別に公言しても、俺は構わないと言っただが、俺の嫁は断固反対する。それというのも、俺が公務員というお堅い職業だからだ。もし、何かで、バレたら職場に居ずらくなるだろうと、俺の嫁は心配するので、こういう時は仲良しの友人という設定で喋っている。

焼けたアワビを切り分けてくれると、仲居は一端、部屋を下がった。すでに、俺の嫁は食う気がない。一個を箸で突き刺して、口元へ運ぶと不承不承という感じで飲み込んだ。

「もうええから、おまえが食べ。これ、おまえが好きなやつやる？」

「もう一個食うとけよ、体力つけとかんと、明日、死ぬぞ？」

「どあほっつ、そんなことになったら、死ぬ目に遭うのは、おまえのほうじゃ。・・・どっかのサーブエリアで土産買って帰るからな。そのつもりで、どっかに寄れ。」

「え？ 誰に？」

「御堂筋さんと、その彼女。エプロンでも土産にするか？」

「そついや、以前、御堂筋の彼女が、うちの嫁に、ふりふりのエプロンをくれたことがある。大いなる間違いなのだが、うちが新婚いちやいちやだと思っただけ。新婚当初でも、そんなことはしたことがないし、そのエプロンを裸にあててみて、おおよそ、これは欲望を感じるものではないと実感した。」

「あはははは……ええな、それ。けど、サービスエリアに、そんなん売ってるかあ？」

「どうやる？」

「土産について、いろいろと考えながら、食事を続けた。さすがに、牛の陶板焼きは、俺でも腹が一杯で、ぎりぎり腹に収めた。」

「食事が終わって、部屋に戻ったら、ベッドメイクされていたカバは外されて、寝られるようになっていた。露天風呂の横にある小さな坪庭には、仄かな照明がつけられていて、なかなかいい雰囲気になっている。」

「さて、露天風呂や。」

「……ちよお、待て。休憩させる。」

「いつもよりは多目に食べたせいか、俺の嫁は腹を擦って、ベッドに倒れこんだ。そのまんま寝てしまいそうな勢いだが、そのとろりと融けたような瞳に、俺は安堵した気分になる。こいつが、この顔をするのは、たぶん俺の前だけだ。」

「……ありがと……」

ゆつくりと仰向きになつて、嫁は俺の頬を撫でてくれた。

「かわいいな、俺の嫁。誘うなや。」

「・・・さそてへんわ・・・いや、さそてるか・・・くくくくく・・・ストリップしたるか？」

「ん？ おまえ、酔つてるな？ おうおう、嫁、ストリップしてくれや。」

「あははは・・・鶏がらのストリップなんかで・・・誘われるて・・・おまえも・・・たいがいにあほやな？」

仰向けに寝転んだままで、ゆつくりと、浴衣の帯を解いていく。

別に色つぽいとは思わないのだが、そんなことをする俺の嫁が可愛いと思う。帯を外すと、片膝だけ立てて、「ご開帳したるかぁー」と、笑っている。

「・・・いや、どうせ、トランクスやしなぁー、その中身。ついでに鶏がらやし。・・・」

「先に、パンツ脱いでから、ご開帳してくれ。」

ああ、なるほど、と、嫁は頷いて、起き上がると、俺に背を向けた。トランクスをぽいと脱ぎ捨てて、そのまんま、露天風呂へ歩いていく。

「おい、何する気や？」

「何て？ ナニやないか。ほら、ご開帳。」

露天風呂の前で、潔く浴衣を脱ぎ捨てて、ぽちゃんと風呂に飛び込んだ。

「・・・色気がない、色気が・・・」

「花月、来いひんのかぁー」

「おまえ、もつと色つぽく脱げや。」

「俺に、そんなもん求めるほつが無理やろ。」

いや、まあ、そうやねんけど・・・まあ、ええか。俺も、たったと脱いで、嫁のとなりへぼちゃんと飛び込んだ。

目が覚めたら、誰も居なかった。この間ほどの無茶はされなかったものの、やっぱり腰がだるい。起きないことはわかっていただろうから、散歩に行ったか、朝メシに出たと思われる。

で、とても気配りができる旦那やと感心するのは、俺の枕元に、ペットボトルのお茶が、ちゃんと置かれているところだ。それを、半分ほど飲むと、俺はぐたぐたと、また寝る。昼メシの時間まで、部屋を借りてあるので、慌てて起きる必要はない。ピチピチという鳥の囀りなんてものが聞こえるのは、静かな温泉旅館らしい音だと思う。

・・・ていうか、せつかくの旅館やねんから、空が白むまでやることないっちゅーねんっつ・・・

途中、何度か露天風呂に入ったり、休憩したりはしたものの、空が白むまで、なんだかんだとやっていた。もう、そろそろ落ち着けよ、と、思うのだが、やり始めたら、やっぱり盛り上がってしまうので、こうなっている。

「うーうー腰だるい。」

もそもそと寝返りをうつただけでも、一苦勞せねばならないのが、非常に不愉快だ。うつらうつらとしていたら、ガラッと障子が開いて、足音が近づいてきた。

「起きたか？」

「・・・腰だるい・・・」

「それは、自業自得やろ？ あんだけ腰を使おうて、なんともなかつたら、俺がビビるで。」

「・・・そうか？・・・振らしてんは、おまえやないか。」

「まあ、そうやけどな。・・・メシ食うか？」

「いらん。」

「風呂で温めるか？」

「せやな。」

とは言っただものの、さすがに担いでいくだけの体力は、花月にもなかつたので、支えて貰って露天風呂まで歩いた。

「確かに、これはええわ。」

すぐ傍に、風呂があるというのは、なかなか有難い。それも温泉だから、なお、身体にもいい。じんわりと温まって、畳の上に転がった。

「水都、土産やけどな。」

その横に転がった花月は、あまり奇をてらったものではなくて、普通の土産を買った、と、教えてくれた。きびだんごと、白桃ゼリ  
ーだと言っ。

「笑いものを贈ると、なんか仲良くなりそうやろ？ せやから、普通のやつな。」

「ああ、そんでええんちゃうか。職場のは？」

「内緒やから、なし。」

「さよか。」

「おまえんとこのおっさんらには、ええんか？」

「いらん。なんで買わなあかんねん。」

「せやなあ。」

「なあ、花月。」

「ん？」

「木曜日に出社というか、なんというかやねん。」

「うん、いらんかったら、おっさん、蹴飛ばして逃げて来い。」

「はははは・・・メチャメチャ凹ってくるわ。」

自然の音しかない世界は、柔らかで心地よいものだ。そこで、ぼつりぼつりと会話して、俺は、また、うとうととしていた。こんな時間があるのは、ふたりでいるからだ。ひとりではできないことだから、ふたりでいたいと思う。

「この時間を製造した責任は、花月にあるから、責任はとってもらってもいい。」

## そのなな

「今日で最後かもなあー。」

俺の嫁は、そんなことを言いながら、弁当を詰めていた。堀内のおっさんからの呼び出しがかかって、本日から職場に顔出しをするらしい。同じようなことになるなら、辞めてしまえ、と、俺は言っている。無理ばかりしなければならぬ職場に居る必要はない。

週末の旅行みたいなことを、もっと体験させてやりたいと思う。のんびりと一泊して、ただ、何もせずに過ごす時間というのは貴重だ。あの朝、俺の嫁は、いつもだったら、すかさず取り出す文庫本をカバンから出すこともなく、のんびりと畳の上に転がっていた。これといって難しいことではなくて、たまに、ぼつぼつと喋って、

昼前までだらだらと過ごしたのは、俺にとっても楽しい時間だった。あれをやるうと思うなら、確実に土日の休みは確定しといてもらわなあかんわけで、それすらも確保できないなら、いくら金回りがよくても意味がない。

「土日祝日は確実に休みでないと、俺は認めへん。」

「うーん、どうなんやろうなあ。」

俺の嫁は、弁当をハンカチで包みながら苦笑している。そこまで時間の余裕は与えられないと思っっているらしい。

「ちゃんと雇用条件を確認してこなあかで、水都。」

「わかってるて。まあ、堀内のおっさんも、おまえのことがあるから、無茶はせえーへんやろう。」

「俺？」

「おまえ、バクダン抱いて来ると厄介やからな。今度こそ殺されるって笑つとつたで。」

「ほんまかいな。」

「とりあえず、元の職場の惨状が、どうなったかは確認してくる。」  
確かに、俺の嫁が辞めたというか、リフレッシュ休暇というかで、

一ヶ月近く仕事を放棄している。それ以前の現状から考えたら、とんでもないことになっていても、おかしくはない。

堀内が迎えに来たのは、十時半だった。久しぶりに、スーツでネクタイを締めたら窮屈な気がした。一ヶ月、締め付ける服を着なかったのだから、身体がだらけている。

「おまたせ、ほな、行こうか？」

玄関から出て、ちよつと絶句した。眼下にあるのは、黒塗りベンツだ。

「なんで、沢野のおっさんまで出張ってるんや？」

「そら、おまえ、総括責任者やからに決まっとるやないか。」

とりあえず、車に乗せられて、以前の職場ではないが、うちからは通うには、変わらない場所に辿り着いた。雑居ビルが立ち並ぶ、中小のビジネス街だ。

「この三階を、ワンフロアーぶち抜きで借りたんよ。」

沢野のおっさんが、先頭で、次に俺、しんがり堀内のおっさんと、秘書がついてくる。エレベーターで上がって、扉を開いたところから顔を覗かせて、もう一度、俺は絶句した。物凄い数のパソコンと、大型のサーバーが鎮座して、さらに、それを可動させている人数も、相当数いたからだ。

……なんじゃ、これ？……

社員と思われる人間たちは、一斉に、立ち上がり、挨拶する。

「とりあえず、紹介しとくわな。この子が、ここの管理責任者の浪速くんや。それから、知ってると思うけど、その後ろのいかついのが、関西担当専務取締役の堀内。以後、このふたりの指示で頼みます。・・・はい、みつちゃん、挨拶して。」

「え？」

「もう、かなんなーこの子は。この人ら、みんな、おまえの部下やから挨拶するんやないか。まあ、見知ったんも入ってるから、怖いことあらへん。ほら、あそこら辺りは、みつちゃんも知ってるやろ？ 東川とか嘉藤とかな。」

沢野のおっさんが、俺を前に引きずりだして、知り合いのいるほうへ手を向けた。「よう」とか「やあ」とか言つて、手を挙げているのは、以前、堀内のおっさんが使っていた人間ばかりで、俺とも顔見知りだ。

「関西を統括するにあたって、人員も用意した。ちまちまと、各支店に配置していたヤツらを纏めたつちゅーわけや。」

背後から、堀内のおっさんが声をかけて、その人間たちを呼ぶとすぐに、周りに集まってきた。みな、一様にいかついおっさんばかりだが、気のいい人ばかりでもある。

「沢野さん、説明もせんと連れて来たんでつしやる？ みつちゃん、鳩が豆鉄砲くろたみたいになってますがな。」

関西支店の半分を統括していた東川が、俺の肩を叩いて、沢野を責めている。「大丈夫やで？ 戻ってきいやー」と、嘉藤のおっさんが、俺の目の前で手を振っている。

「な、な、なんで？ 東川さんがおるんやったら、俺、その下でええがなつっ。」

そうなのだ。年齢的には、東川のほうが、かなり上で貫禄もあるし、経験もかなりある。それなのに、俺が管理責任者つてことに、まず間違いがある。

「どあほつっ、うちは年功序列の生温い会社やあるかいっつ。いや、年功序列で言うたかつて、おまえが勤続年数一番長いがなつっ。」

「おまえ、わしに、これ以上にストレス溜める仕事をせえーと言うつもりかいな？」

「若いもんが苦勞と責任は背負たらええんや。」

なんだか、口々に、今度は俺が責められて、とりあえず、名前だけを言わされて挨拶させられた。他の人間たちは、不思議そうにしていたが、同じようにお辞儀して挨拶は返してきた。そりゃ、俺みたいに若いのが管理責任者やって言うても信用されるわけがない。

とりあえず、挨拶すると、ぞろぞろと、古い知り合いと共に、奥の一室に連れ込まれた。そこは、幹部室らしく、重厚な応接セットと、高そうな机が二台並んでいる。

「お茶いれたってんか。ああ、みっちゃんのは冷たいのにしたってや。」

どっかの家に遊びに来ているような気楽さで、沢野が命じると、どっかりとソファに腰を下ろした。その横に、堀内も座り、いきなり、たばこに火をつけている。

俺が辞めた一ヶ月で、ここまで準備するのは無理があるぐらいに、何もかもが整っていた。だいたい、東川や嘉藤は、別の県に住んでいたのだ。引越するのも準備があるだろうし、ついでに言うならインフラの整備だけでも一ヶ月ではできないはずだ。ひっかけられたと、俺は直感した。この場で、それは、はつきりさせておかなければ、後々ややこしくなる。

ふたりの前に、俺は仁王立ちで立って睨んだ。見慣れた顔なんて、怖いとは思わない。

「おい、おっさんら、いつから、こんなことしってたんや？」

「なんのことや？」

「このシステムを構築するだけでも、半年仕事やないかつ。それが、なんで、俺が辞めた一ヶ月で完備できるんかを説明せいや。・・・俺が辞めるんを見越してたってことか？」

「ああ、まあ、予定には入ったな。あの店長、前科アリや。それで中部に置いとけへんから、こっちへ捨てたっちゅーことだな。そのうち、みっちゃんに罪を全部なすりつけてくるのは、わかっただし、中部の子飼いのヤツを大々的に処分するには証拠を確実に掴む必要もあつたんで、おまえのそこへ配置した。」

「いや、わしは反対したんやで？ みっちゃん。でも、堀内が勝手に進めてしもたからな。」

「沢野はん、わしに全部の権限がないんは、みっちゃんも知ってるから。」

つまり、ふたりして、今回のことは、半年前から密かに動いていたらしい。関西統括部門を作るのは、一年前から計画されていたが、それを、どこへ置くかで揉めていた。本来は本社にあるのが妥当なのだが、堀内の部下は、ほとんどが関西在住で、それらを移動させるよりは、部門を、関西に置くほうが安上がりであるということと、関西では、ちよるまかしや持ち逃げはできないのだと、他の部門に知らしめるために、わざわざ、問題のある従業員を引き取って、実験したらしい。そして、俺は、その摘発に、一役買っていたのだ。それも、当人には知らせずに、だ。

「つまり、俺が監視している限り、問題は起きへん、と、アピールしてくれたわけか？ わざわざ、俺と問題起こすの判つとつて？」

「いやいや、そやけど、ものすごい評価上がったんやで？ みっちゃん。ほんで、関西統括責任者に就いてもらえるんやないか。」

最終的には、俺の評価を底上げする形になって、管理職というものの、関西を離れずに就けることになっている。給料も待遇も、それ以前とは、かなり格上げされたらしい。

「東川と嘉藤と佐味田が、以前、おまえがやつとつた日報関連の仕事をこなす。そこから、資金を回す状況を判断して、関西の支店へ配分したってくれたらええ。・・・せやから、朝は定時に来んでもええし、夜も、好きな時間に帰ったらええ。それだけの仕事やつたら、定時過ぎぐらいで帰れるやろ？」

「堀内のおっさんは、何するんや？」

「わしは左団扇で、おまえの頭をはたいてるがな。ははははは。．．．  
．．．冗談はおいといて、月の半分は、こっちにおるけど、半分は東海のほうを回してくるからな。おっちゃんは忙しいから、おまえが好きなようにしといてくれたらええ。」

「実質は、みつちゃんが、ここの責任者や。これで、バクダン小僧も納得してくれるやろう。」

『バクダン小僧』の言葉に、他の人間が噴出した。ここにいる人間は、花月がバクダンを抱いて、俺を迎えに来た、その場にいた人間ばかりだ。

「まだ、続いてるとはなあ。」

「なかなかできへんこっちゃけど、あれは傑作やったわ。」

「あははははは．．．いやあー人生長なると、おもしろいもんを見られるで。」

たぶん、花月が、これを聞いたら、今度こそ本当に、ここを爆破するに違いない。重要な話が終わったところへタイミングよく、お茶が運ばれてきた。座れ、と、堀内の横に座らされて、他の三人が対面に座って、とりあえず、お茶を啜る。

．．．これは逃げるとか以前の問題やと思うんやけど．．．

騙されていたというか、いよいよに手のひらで転がされていたというか、そういうところなのが、腹立たしい。

「みつちゃん、怒ったらあかんで？ ごはん奢ったるからな。お肉がええか？ お魚がええか？」

沢野は、本当に食えないおっさんだ。計画したのは、堀内ではない。たぶん、この口八丁手八丁の沢野に違いない。

「一発殴らせる。」

「あかんで、おっちゃん、もう年寄りやからな。みつちゃんにしかかれたら死んでまうからな。なあ、怒らんとってな？ 堀内はしば

いてもええから。」

「おいおい、沢野はん、それはないやろ？」

「まあまあ、みっちゃん、この人ら、かなり善行をしたつもりやから怒ったらんといてくれ。やり方はあこぎやけど、みっちゃんを幹部に引き上げたからな。」

東川さんの取り成しを受けて、仕方なく、俺は頷いた。仕事自体は、以前にもやっていたことだから、難しいことはない。やっていた範囲が広がって、雑用がなくなったという感じだ。

「わかったわ。俺、旦那から『土日祝日は確実に休め』って言われてるから、それだけ守ってくれたらええ。」

「それは、いけるやろ？ 問題はない。さあ、沢野はん、なんぞ、みんなに奢ってもらいましょか？ 東川、何がええ？」

もう、俺は責任者に確定したらしい。堀内のおっさんが、昼飯について場所を決め始めて、みんな、その話題にのっかってしまったからだ。

どうやら、俺の嫁は昇格したらしい。だが、当人は、面倒やと文句を吐いているが、雇用条件が改善されてしまったので、辞めることはできなかつた。以前のような忙しさでないのなら、まあ、ええか、と、俺は早々に辞めさせることは諦めた。たぶん、何があるかと、俺の嫁は辞められない仕組みになっている。

それでも、俺が定時で帰るよりは、ちょっと遅いので、食事の準備は、やっぱり、俺の担当だ。本日は、こっそりと贈られたものに

ついでに、こっそりとしたお返しの日だ。

「ただいまあー。」

「お帰り、風呂入るか？ もうちょっとやねん。」

「うん、ほんなら入るわ。」

まだ、二日目で、身体が慣れないらしく草臥れている。一ヶ月も自堕落に過ごすと、会社での時間が早すぎて目が回ると、愚痴りつつ、風呂場へ俺の嫁は消えた。

「給料上がるらしい。でもな、使い込みとかちよるまかしが判明すると、減俸になるらしい。」

「ふーん。」

髪の毛を拭きつつ、俺の嫁が食卓にやってきて、立ち止まった。

「あれ？」

「ん？」

「なんか白いもんばつかしやな？」

「今日は、そういう気分なんや。草臥れてるから、あっさりしたもんがええやろ？」

食卓に並ぶのは、蒸し鯛のあんかけ、長いものすりおろし、揚げ出し豆腐、そして、白ミソ仕立ての味噌汁だ。甘い物が苦手な俺の嫁に贈るなら、白い食べ物でいい。

「長いも、卵も入れるか？」

「いや、これだけでええわ。あー食い易いわーこれ。」

「そうやるそうやる？ 鯛もええ感じやで。」

「うん、うまい。」

「はははは……ちゃんと、おまえ用に冷ましといたったからなあ。」

「なあ、花月。」

「ん？」

「なんで、白ミソなん？　うちの家で、こんな見ると初めてやねんけど。」

「あー、一品くらい甘いものを食わせてみたかったから。でも、酢味噌とかは、これで作ってるで？」

「甘いもんで……白メシに甘い味噌汁はあかんやろ？」

「いややなあー俺の嫁。これ、ホワイトデーやんか。あまえが、こっそりとくれたチョコケーキのお返し。愛が一杯やから。」

「……どこの乙女や？　おまえ……」

「吉本家の花月です。なんなら、浪速家の花月でもええ。」

「どあほ、メシで遊ぶな。ぼけっつ。」

照れ隠しに、俺の嫁は、俺の足を蹴って、黙々と、その味噌汁を飲んだ。まあ、愛の言葉をくれるほどには、酔ってないからじゃないか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5867p/>

---

だうん

2010年12月29日17時25分発行